

漢籍における声点附和訓の性格

小林芳規

一、はしがき

漢籍の訓点資料の中には、その漢字句の読みを示す為に加えた仮名に更に声点を差した語や句を持つ資料がある。このような声点附の語句を持つ資料は、平安鎌倉時代の漢籍訓点資料の大多数にわたっている。所が、声点附の訓の一卷当りの例数は全般に少い。それは、一卷中の和訓の全用例数に比較すれば明かであつて、一卷中に声点附の訓が一例か二例しか存しない資料も二十点以上数えられる程である。凡そ、仮名に差された声点の機能は、仮名で表記された語句の声調を示すものであり、それが当該期の声調研究の対象として、従来取上げられて来たのであるが、漢籍の訓点資料において、声点の差された訓は、同資料中の、声点の差されない訓に対して極めて限られた少数のものであることを考えると、差声という行為が、声調を示す以外に、もう一つ別の機能を持っていたのではないかと推測される。この推測は、その声点の差されている和訓に特殊な語彙が目立つことから為される。

本稿の意図は、差声について、此の声調を示すとは別の機能を解

明することにある。それは必然的に、漢籍における声点附の和訓の性格を説明することになると考える。

漢籍の差声訓の示す声調そのものにも言及すべき種々の問題が認められるが、これについては、本稿の目的に必要な限りで触れることとし、詳細は別の機会に譲った。

声点には、声調と同時に濁音をも表示するものがあり、漢籍の訓点資料では、点二つの符号で示されている。所が、この濁音表示の符号は、別に、単声点とは併用しないで濁音節の仮名にこの濁音符だけが附される場合がある。この場合は、声調とは必ずしも係りなく、又用いられる時期も異なつて、単声点が一般には用いられなくなる室町時代前後から、その濁音符が多くなつて来る事情が認められるので、本稿では、単声点と併用されない、濁音節のみ表示の濁音符附の訓は、除いた。又、漢字音を仮名で表わした語に声点を差した例が、史記延久五年点や古文学経建久六年点等に少数あるが、その資料における分布が限られており、使用量も和訓の場合と異なつて、事情を別にするので、これも本稿では対象から除いた。尚、原資料の声点は、印刷の都合上、その示す声調に従つて「上」「平」

古文孝経 猿投神社蔵
夏本紀 東洋文庫蔵
周本紀 高山寺蔵
殷本紀 高山寺蔵
史記范雎蔡沢列伝 書院部蔵
論語 卷七、卷八 高山寺蔵

建久六年(二九五)点 (未は承安四年点)
鎌倉初期点
鎌倉初期点
建暦元年(二二二)点
鎌倉初期点
鎌倉初期点

一帖 20 (別に字首にもあり)
一帖 21
一帖 5
一帖 1
一帖 0
一帖 0
一帖 0

古文孝経 内蔵乾吉氏蔵△

仁治二年(二三四)識語本

一軸 2 (別に字首にもあり)

三手文庫本△

建治三年(二七七)点

一軸 8

書院部蔵

永仁七年(二九九)点

一帖 4

天理図書館蔵

正安四年(三〇〇)点

一帖 3

東洋文庫蔵

延慶元年(三〇〇)点

一帖 6

書院部蔵

元徳二年(三三〇)点

一軸 1

斯道文庫蔵

鎌倉期点

一軸 9

論語 卷七、卷八 (中原本) 醍醐寺・東洋文庫蔵

文永五年(二六八)点

一軸 5

卷四、卷八 高山寺蔵

嘉元元年(三〇三)点

一軸 4

東洋文庫蔵

正和四年(三二五)点

一帖 2

書院部蔵

嘉暦二年(三三七)点

一帖 9

大東急記念文庫蔵

建武四年(三三七)・康永元年(三三四)点

一帖 7

卷三、七、十 猿投神社蔵

康安二年(三六二)点

一帖 4

神宮文庫蔵

正和三年点 (補写の巻もあり)

一帖 6

東洋文庫蔵

元徳二年(三三〇)点

一軸 1

九条本所蔵

鎌倉期点

一軸 1

卷十三 大東急記念文庫蔵

元亨三年(三三三)点

一軸 0 (残存数量少し)

尚書正義

鎌倉末期点

一軸 0 (星点のみ)

毛詩二南 大念仏寺蔵△

鎌倉末期点

一軸 3

春秋経伝集解 金沢文庫本

鎌倉期点 (文永五・六年、弘安元年)

一軸 112

(巻別内訳) 卷一8、卷二1、卷三7、卷五5、卷六2、卷七2、卷八1、卷十2、卷十二3、卷十三15、卷十四5、卷十五3、卷十六6、卷十七3、卷十八9、卷十九6、卷二十8、卷二十一2、卷二十二1、卷二十三1、卷二十四3、卷二十五10、卷二十六3、卷二十八1、卷二十九3、卷三十二2

老子 梅沢彦太郎氏蔵

書院部蔵

折道文庫蔵

莊子 高山寺蔵

臣軌 書院部蔵

帝範 折道文庫蔵

梅沢彦太郎氏蔵

帝範臣軌 猿投神社蔵

白氏文集 大東急記念文庫蔵

文集抄 国会図書館蔵

新樂府 卷下 大東急記念文庫蔵

卷上 天理図書館蔵

卷上 書院部蔵

卷上 猿投神社蔵

卷下 猿投神社蔵

卷下 東洋文庫蔵

文選 卷三 大東急記念文庫蔵

卷一 猿投神社蔵

卷一 猿投神社蔵

九条本△

遊仙窟 醍醐寺蔵

真福寺蔵△

貞観政要 卷一 書院部蔵

卷二下 卷十 穂久通文庫蔵

卷一 五島美術館蔵

応安六年(二三七三)点

至徳三年(二三八六)点

康応二年(二二九〇)点

鎌倉期点

鎌倉期点

応安元年(二二六八)点

鎌倉後期点(卷上、卷下、取合本)

南北朝期点

寛喜三年(二二三二)点

建長二年(二二五〇)点

嘉禎四年(二二三八)点

永仁元年(二二三八)点

正中二年(二二三五)点

貞治二年(二二六三)点

文和二年(二二五三)点

鎌倉期墨訓(宋は嘉吉三年加色)

鎌倉中期点

弘安五年(二二八二)本

正安四年(二二〇四)校本

正慶二年(二三三三)頃点

康永三年(二三四四)点

文和二年(二二五三)点

建治三年(二二七七)点

鎌倉期点

(卷三は補筆)

二帖 1

二帖 0 (濁点のみ)

二帖 1

残五軸 2

一帖 1

一軸 0

二軸 0 (濁点のみ)

二軸 0 (濁点のみ)

二十軸 1

一帖 1

一軸 4

一軸 0

一軸 1

一軸 1

一軸 0 (濁点のみ)

一軸 3

残一軸 6

一軸 28

一軸 4

十四軸 4

一軸 16

一帖 2

一軸 2

九軸 6

残一軸 0

右の表から次の事が判明する。
先ず、声点附和訓の有無を資料別に見ると次の如くなる。

(一) 声点附和訓の有る資料

- (1) 平安後期から南北朝期にかけての漢籍訓点資料で、古く平安中朝以前から講読された証のある漢籍(注2)には、声点附和訓を存する。従って、此の期の大部分の資料には、声点附和訓が存する。

- (2) 室町時代の漢籍で、平安鎌倉時代の古訓を比較的忠実に伝えた資料には、十数冊或いは数十冊中に数例という少数ながら、声点附和訓を存する。此の期には、一般には声点附和訓を見ないのである。

(二) 声点附和訓の無い資料

- (3) 平安初期・中期の資料には声点附和訓を見ない。
(4) 室町時代の資料は、右の(2)以外には、一般に声点附和訓を見ない。
(5) 平安後期以降に新たに読み始められた漢籍には、声点附和訓を見ない。例えば、朱子注四書や三略(現存の知恩院蔵本によると)の如きには、声点附和訓を全く見ない。

- (6) 平安後期から南北朝期までの(1)と同資格の資料でも、次の場合には、声点附和訓を見ない(注3)。これは、(3)~(5)と事情が異なり、偶然の働く余地があるものである。

(1) ヲコト点のみで仮名訓の無い資料

- (a) 仮名訓が極めて少数である資料
(b) 残簡等で、全巻の量が少量の資料
(c) 僧侶の移点した漢籍訓点資料の中には、声点附和訓を見ないものがある。

次に、声点附和訓の量について見ると、
(7) 院政後期及び鎌倉初期資料においては、一巻当りの声点附和訓の量が他より多い傾向を認める(注4)。

- (8) 全体的に一巻当りの声点附和訓の量は数例前後であって、必ずしも多量ではない。試みに、声点附和訓を持つ平安後期から南北朝期までと室町期の三資料との右表の漢籍の巻及び冊数を数えると、四百十三の巻冊となる。声点附和訓の全例数が四百十六であるから、声点附和訓の例は全巻中の傍訓に比較して少い。

の二点が知られるのである。

三、漢籍における声点附和訓の性格の検討

前節において判明した八条を通じて、次の二点が解釈される。

- (A) 漢籍において和訓に声点を差すことは、平安後期以降に、或少数の語について、或理由で生じた。その理由は南北朝期までの漢籍一般に通ずるものであった。しかし、室町時代にはその必要が一般には消失した。

(B) 声点附和訓は、伝統的な古い訓と関係があると思われる。

此の例を解明する事が、同時に(A)の理由を解く緒ともなると考えられる。そこで、(B)を仮説として立て、之を声点の附された和訓の語法や語彙の上から検討してみる。

検討には、三つの方法を採用した。第一は、声点附和訓について、その和訓と、比較の相手として同一内容の漢籍の平安初期中期の訓点資料の同箇所の和訓とを比べて、その訓の異同を調べる方法であり、第二は、筆者の考える漢文訓読史の方法によって、声点附和訓が平安初期訓法と一致することを確かめる仕方であり、第三は、上代語又は平安初期中語を用いた他文献に、声点附和訓と同じ語を求め、両者を比較する方法である。

I 声点附和訓について、その和訓と、同一内容の漢籍の平安初期中期の訓点資料の同箇所の和訓とを比較する方法

此の第一の方法によると、後世の訓点資料の声点附和訓が、古い訓読語の残存と見られるか否かを的確に知る事が出来る。声点附和訓が、同漢文を訓読した平安初期中の訓法と全く同じであれば、その可能性が大だからである。但し、此の方法では、平安初期中の漢籍訓点資料で現存する資料が少数である為に、比較が出来るのは、尚書の延喜頃点(岩崎文庫本・九条本・神田喜一郎博士蔵本)と鎌倉期点だけである。之に三つの場合がある。(1)夏本紀鎌倉初期点と同一内容の漢文を含む岩崎文庫本尚書延喜頃点との比較、(2)九条本(現御物)尚書延喜頃点と同本所載の鎌倉期点との比較、(3)九条本尚書延喜頃点と神宮文庫蔵古文尚書正和三年点(二三一四)との比較である。

此の三つの場合ともに、声点附和訓は、尚書延喜頃点の和訓と、仮名の有る箇所一致する。

(1) 夏本紀鎌倉初期点の声点附和訓と岩崎文庫本尚書延喜頃点の和訓との比較(一致)

○夏本紀鎌倉初期点の声点附和訓

(a) 東原。直イナシ(上上平) 平ヒラ

(b) 其土黒。墳ウツコ(上上上)

(c) 厥草。惟・繇ツレ(平上)

(d) 築浜・広。瀉ツクリ(上・平濁ナリ)

○岩崎文庫本尚書延喜頃点の訓法

(a) 東原。直イナシ 平ヒラ

(b) 厥土黒。墳ウツコ

(c) 厥草。惟繇音通茂也(注5)

(d) 築浜・広。序シ

夏本紀鎌倉初期点(東洋文庫本)の巻首より数えて三十一行から七十一行までの本文が、岩崎文庫本尚書の巻首から四十六行までの禹貢の一部と同文を持つ(注文には少)。夏本紀鎌倉初期点には声点附和訓は全巻で二十一例ある中、右の共通する部分には五例が含まれたのが右例である。(内一例は延喜頃点に仮名がないので除く)両資料の訓法を比較するに、訓法を同じくする部分もあるが、甚しく異なる所が多い。例えば、夏本紀鎌倉初期点では、

○九一河既道ニヤヒチ

○鉛ニ松ノ・柞ノ石ヲ

と訓読する箇所を、尚書延喜頃点では、

○九河ノ元ノ（既ノ）道ヲ

○鉛ノ・柞ノ石ヲ

と異なった訓読をしている。それにも拘らず、夏本紀鎌倉初期点の声点附和訓は、延喜頃点の訓と同じである所に意味があると考えられる（注）。

(四) 九条本（現御物）尚書所載の鎌倉期点と同本の延喜頃点との和訓の比較（一致）

○九条本尚書所載鎌倉期点の声点附和訓

乃有ニ室ノ・大競ニ・額ノ（上平）テ・映ニ・尊ニ上帝ニ（正和三年点）

○同本尚書延喜頃点の訓法

乃有ニ室ノ・大競ニ・額ノ（上平）テ・映ニ・尊ニ上帝ニ（正和三年点）

尚書延喜頃点の九条家旧蔵本（岩崎文庫本と僚卷）には、卷十に延喜頃点とは別の、鎌倉時代になって書込まれた訓法がある。その中に一例だけ右掲の声点附和訓「ヨム（上平）テ」がある。延喜頃点と鎌倉期点との訓法を比較すると大差があるのに、右の声点附和訓は、語そのものとしては延喜頃点と同一である。

(イ) 神宮文庫蔵古文尚書正和三年点（一三二四）の声点附和訓と九条本尚書延喜頃点の和訓との比較（一致）

○古文尚書正和三年点の声点附和訓

以ニ王之ノ鑑ニ民ノ家説（卷八召詔）

○九条本尚書延喜頃点

目王之ノ鑑ニ民ノ（卷八召詔）

両本の訓を比較するに、助動詞の有無の相違はあるが、「鑑」字の訓として同じ単語である。正和点には声点附和訓が六例あるが、九条本と比較するに九条本が欠けていたり或いは仮名が無かったりして、比較できるのは右の一例であるが、それがやはり同訓なのである。

古文尚書において延喜頃点の訓法と鎌倉時代点の訓法とでは甚しい相違がある。その相違は、漢文訓読史上古い訓から新しい訓への推移を反映するものであった（注）。一方不変改の訓もある。それが、日常語で古今通じて変らなかつた「やま」「かは」等の日本語であるのは諒承できるが、中には普通には用いない語や漢字との組合せが特異と見られるものもある。右の声点附和訓は此の種の不変改の語である。

II 漢文訓読史上、平安初期（又はそれ以前）の古い訓法を伝えんと考えられる語に声点が附されている事

漢文の訓読法は、平安初期と平安後半期以降とは著しい相違があり、そこには一定の傾向に従つて史の変遷をする事実が認められた（注）。この事実と方法に従えば「平安初期（又はそれ以前）特有訓法」が得られる。それは平安後半期以降は一般には用いないものである。「一般には」というのは漢籍では後世も稀に用いる事を踏まえているが、漢籍において声点が附されている訓の中には、此の種の訓法に属するものがある。

(又カ) 親ミヌカノ平ノ上ノ平ノ朱（古文孝経建久点朱点）

親ミヌカノ平ノ上ノ平ノ（仁治識語本）

親ミヌカノ平ノ上ノ平ノ（永仁点）

親ミヌカノ平ノ上ノ平ノ（正安点）（声点は圈点）

親ミヌカ(上上上) (斯道文庫蔵鎌倉期点朱点)

「ヲサヘニ」(上上上) (夏本紀鎌倉初期点)

「ナラシ」(「蓋」の呼応)

蓋謙辞(上上上) (古文孝経建久点)

「トイヘリ」(「詩云」の呼応)

詩云……瞻(上上上) (古文孝経建久点)

「ヤ」(感動)

周易有(上上上) (金沢文庫本春秋卷二十六)

「イ」(助詞)

大史公・曰・余上(上)以頌次契之事(殷本紀建曆点)

「ヌカ」「ヲサヘニ」「ナラシ」「トイヘリ」「ヤ」(間投助詞)「イ」

は、平安初期訓読語であって、それが漢籍に残存したと考えられる事については別の機会に説明した所である(注9)。

「否」(訓)

島(上) 辭(上) 否(上) (毛詩二南鎌倉期点)

「否」字は後世は「シカラズ」の訓を施して如何なる文脈でも一様に訓読する。之に対して、上の「アラヒ」の動詞の訓を再び用いて

その否定形「アラハザラ」の訓を施す方法は、訓読史上、平安初期の訓読態度に通ずる(注10)。

〔古説・或説の注記訓〕

吾儕或説(上上上) (春秋経伝集解保延点)

春秋経伝集解の金沢文庫本・保延点における古説・或説の訓はその

識語にいう平安初期天長九年点であると考えられる(注11)。

「呀オノ」 呀オノ平去(夏本紀鎌倉初期点)

「オノ」が万葉集に見える上代語で(それも漢文訓読語との関係が考えられる)、平安時代以後も一部の漢籍に伝えられた事は別に述べた所である(注12)。

〔他アタシ〕 他アタシ(上上上) 辞(論語卷八文永点)

他、アタシ(上上上) 辞(嘉元点)

他アタシ(上上上) 辞(康永点)

越アタシ(上上上) 人(礼記宣賢点)

他アタシ(上上上) 辞(論語卷八正和点)

寒コイ(上上上) タルカ(古文孝経正安点)

〔ナ(連体助詞)〕前アナサキ(上上上) 辞(論語嘉曆点)

〔ナフ(接尾語)〕数カソフ(上上上) (金沢文庫本春秋二十)

時トキナフ(上上上) (卷十三)

これらは、語法・語構成から見て、平安初期以前の古訓法との関係を考える事が出来る。

〔廁カハ〕 廁(上上上) (金沢文庫本春秋卷十二)

別に「如廁」にもあるから「カハ」の語は間違いないと思う。この文意は「便所」で、観智院本類聚名義抄にも体言の訓として「カハヤ(上上上)」一訓を収めている。「カハヤ」は語源が「川屋」とされるもので、或いは古代人の習俗を反映した古訓かも知れない。

〔来コ〕 来(去) (命令形) (莊子鎌倉期点)

訓読語では「キタル」を用いるが、カ変動詞も漢籍の一部や日本書紀古訓には見られる(注13)。さすれば古訓の残存と無縁ではない。

〔カヘンズ〕 不肯(上上上) 辞(論語正和点)

〔如シカス〕 天地如(上上上) 之(群書治要鎌倉期点)

〔所以コノユエニ〕所以（平平上上）〔巨軌鎌倉期点〕〔圈点〕

これらは漢籍特有ではないが、その訓法は古訓法と関係があるものである。

以上ⅠⅡに共通して、声点附和訓は、平安初・中期以前の古い訓読語を後世に残存させたものと認められる。所が、右掲の語群は声点附和訓四一六例の中の一部に過ぎない。そこで他の例についてもⅠⅡで認めた事が当るか否か検討する要がある。

Ⅲ 他文献における上代語又は平安初・中期語と比較する方法

声点附和訓が、古訓の残存を示すものであるという仮説を証する為には、それらの語が平安初・中期以前の文献に存在したという積極的証拠が必要である。この方法にはⅠⅡで取挙げられた語も覆われるべきである事は無論である。

1 声点附和訓四一六語とそれぞれ同じ語を、万葉集・古事記・日本書紀の歌謡訓註に求めると（注14）、次の語が一致する。〔万葉集・記紀の語例は原則として省略する〕

蹠アカ（上上濁）イテ（古文孝経建治点）〔万葉集〕

頰アカタム（平平平平）〔文集嘉吉点朱〕〔班アヲチ〕〔万葉集〕

嗽アキタル（平平平上）〔孝文本紀延久点〕〔万葉集〕

嗽アキタル（上上上）〔史記実隆本〕

煦アキトウ（上上濁平）〔文集貞治点〕〔記〕

長アク（上上）先（九条本文選十四）〔万葉集〕

誼アサムキ（上上濁上平）〔九条本文選承安点〕〔万葉集〕

他アタシ（上上上）辞（論語文永点）〔異アツ〕手枕〔万葉集〕〔阿多志久尔（日本紀竟宴和歌）〕

他アタシ（上上上濁）辞（論語嘉元点）

他アタシ（上上上）辞（論語康永点）

他アタシ（上上平）辞（論語正和点）

越アタシ（上上上）人（礼記宣賢点）

中アタテ（上上上平）〔金沢文庫本春秋卷廿二〕〔中以（記訓）〕

不ル惜アタラ（上上上）シマ（文集天永点）〔桐栞羅斯枳（紀）〕

煽アライテ（平平上濁）〔文選弘安本〕〔扇アフキ（名詞）〕〔万葉集〕

不溢アフサ（上上濁上）〔古文孝経建久点〕

不溢アフサ（上上濁上）〔古文孝経延慶点〕〔人乎母安夫左波受（万葉集）〕

不溢アフサ（上上濁上）〔斯道文庫藏古文孝経鎌倉期点〕

冗（アカル）〔平平平〕〔斯道文庫藏古文孝経鎌倉期点〕〔万葉集〕

宣アラク（平平上）其気（金沢文庫本春秋卷二十）〔散ウツキ（記）〕

否アラハ（平上上）サラム（毛詩二南鎌倉期点）〔安良布（洗）〕〔万葉集〕

著アラハス（平上）〔群書治要鎌倉期点〕〔万葉集〕

周易に有アラシヤ（上上平）之（金沢文庫本春秋卷二十六）〔記〕

有アラシ（去平平）矣（論語卷七文永点）

不親（ア）アラ（平平）於兄（金沢文庫本春秋卷二）

輸イタス（平上上）〔金沢文庫本春秋卷五〕〔船伊多之（万葉集）〕

輸イタス（平平濁上）ニ税（文集抄建長点）〔輸イタサシム（天理本金剛波若經集驗記）〕

不輸イタサ（平平濁平）粟（金沢文庫本春秋卷二十五）

輸イタ（平平濁）シ（金沢文庫本春秋卷二十五）

將（古）に（ト）ず（古）隨イタサ（平上濁平）ントキニセントス（金沢文庫本春秋卷二十）

不造イタラ（上上上）〔孝景本紀大治点〕〔記〕

熱イツクシ(平上濁上平) (遊仙窟康永点) (伊都久志吉国 (万葉)
近イヌ(上上) (論語康永点) (万葉)

祝イハヒ(平上上)我を(金沢文庫本春秋卷十三) (万葉)

函文余イルハカリ(上上上上平) (文集寛喜点) (伊流思保 (万葉)

膜イロトル(上上平濁上) (古文尚書正和点) (色取 (万葉)

使問ウカ、ハ(上上濁上平)公を(金沢文庫本春秋卷三) (記)

辭ト弟トコトニオコレリ(平平上〇) (文選卷三鎌倉中期点) (起(記))

吁ヲノ(平去) (夏本紀鎌倉初期点) (万葉)

佩オフ(平上濁) (論語嘉曆点) (於魔せる(紀))

行オホスル(平平上上)八風を(金沢文庫本春秋卷一) (神に於保世む
(万葉))

匪カノ(上平)行邁(金沢文庫本春秋卷十四) (鹿鳴山辺 (万葉))

以レ戦ホコ鉤カ、ヲ(平上平)之(金沢文庫本春秋卷十七) (可賀利も

神のまにまと (万葉))

驚カク(上平) (貞観政要卷四建治点) (可伎も梳らず (万葉))

音カケ(平上) (文選卷三鎌倉中期点) (可鷄の垂尾 (万葉))

石ニ称カケ(上上) (六臣注文選応永点) (靱懸流 (万葉))

瀉カタ(上平濁)ナリ (夏本紀鎌倉初期点) (万葉)

哀カシヒヲ(上平去上上) (古文孝経建久点) (可奈之備いませ (万葉))

陷廁カハ(上上上)に(金沢文庫本春秋卷十二) (万葉 (川の語源によ
る))

不渝カハラ(上上上) (九条本文選承安点) (万葉)

垂レ頰カヒ(上平輕濁) (文選弘安本) (葦牙……宇麻志阿斯訶備比古
遲神 (記))

不施カ(上上) (論語卷九康永点) (衣手易而 (万葉))

渝カ(テト上平〇)家説(金沢文庫本春秋卷一) (万葉)
復カ(サフ〇〇平上濁) (論語嘉曆点) (針袋可刃佐倍は(万葉)。こ
の歌「於能」もあり)

覆カ(サフ) (平平上平) (古文孝経建久点)

変カリ(上平)夷(金沢文庫本春秋卷一) (記)

不肯キカス(上上上) (呂后本紀延久点) (紀) (不肯(金剛波若経集
驗記))

女ナムチ聴キケ(上平) (夏本紀鎌倉初期点) (万葉)

衣キ(上平) (孝景本紀大治点) (万葉)

開闔(開闔) (文選弘安本) (正安本文選には「開闔」の異訓
がある。さすれば「端伎流(万葉)」と同源であろう)

日、側クタン(上上濁上) (貞観政要卷一建治点) (我盛いたく久多知
ぬ (万葉))

回来コ(去) (莊子鎌倉初期点) (紀)

来朝スルコト(〇〇平濁上)に(帝王略論鎌倉後期点) (万葉)

毎コトニ(金濁上平)懐ヲモハ、(群書治要卷三鎌倉期点) (紀)

僻サカリ(上上上) (文選弘安本) (記)

隰サハ(上上) (文選弘安本) (山田之沢に (万葉)。(新訳華嚴経音
義私記))

楛コヲサ(ヘニ) (去上上上〇) (夏本紀鎌倉初期点) (吾左倍爾 (万葉))

如シカス(平平上上)之(群書治要卷一鎌倉期点) (然為がに (万葉))

(然也) (天理本金剛波若経集驗記))

籍シク(上上上)之(金沢文庫本春秋卷十四) (万葉)

淪シツメリ(上上平〇) (九条本文選承安点) (沈之妹 (万葉))

衰シナス(上上) (金沢文庫本春秋卷十七)〔令死(万葉)〕

死シヌ(上上) (古文孝経建久点)〔之奴べし(万葉)〕

驟シハシハ(上上〇〇) (古文孝経正安点)〔万葉〕

内シリヘ(平上上) (論語嘉厓点)〔斯裂蔽(後方)(紀)〕

維機キラス(平上平) (夏本紀鎌倉初期点)〔賢良平為と(万葉)〕

欲反ハムセン(〇〇上濁平) (帝王略論鎌倉後期点)〔船乗世武登(万葉)〕

〔葉)〕

夜縫ツリ (金沢文庫本春秋卷十六)〔此夜須我浪爾(万葉)〕

不荒スサヒ(上上) (金沢文庫本春秋卷十九)〔朝露に咲酔左乾た(万葉)〕

〔葉)〕

迭スキ平上濁 (金沢文庫本春秋卷十三)〔万葉〕

軼スキ上平輕カ (文選弘安本)〔須擬て(記)〕〔軼(漢書天厓点)〕

凡スヘテ(上平濁上) (古文孝経建久点)〔凡(記)〕

撮スヘテ(上平濁平) 凡 (古文孝経建治点)

欲レ速スミヤケンセマク (上濁上〇) (論語康安点)〔見幕欲為礼(万葉)〕

求セム平上賈也 (論語卷八嘉元点)〔万葉〕

降レ敵ソク(平上濁)ニ (古文孝経建久点)〔寸十板(万葉)〕

冗タカヒテ(上上平上)〔上欄にもあり〕 (金沢文庫本春秋卷二十四)〔母に(万葉)〕

多我比ぬ (万葉)〕

志気凡タカヘリ(上上濁平)也 (金沢文庫本春秋卷二十)〔萬葉〕

厲タカラ(上上上) (九条本文選保元点)〔優れる多可良(万葉)〕

上タチマツル(〇〇上上)〔爾点ニチはマコ〕 (論語卷一建武点)〔万葉〕

腕タムキ(平上平) (遊仙窟康永点)〔記)〕

過タチ平上 (九条本文選承安点)〔親の名多都な(万葉)〕

弥タチ平上滅 (九条本文選承安点)〔多輝の宿り(万葉)〕

行タヒ(上平) (金沢文庫本春秋卷三十)〔多輝の宿り(万葉)〕

狂タフレタル(上上上平) 呪 (文選弘安本)〔多夫礼たるしこつ翁(万葉)〕

〔葉)〕

瘳タフレ(上上濁平)タル狗 (金沢文庫本春秋卷十六)

巫医ニタモ平上 (帝王略論鎌倉後期点)〔今日太仁母(万葉)〕

〔地蔵十輪經元慶七年点)〕

誰に (金沢文庫本春秋卷二十九)〔万葉)〕

相ノ耦ツコシテ (金沢文庫本春秋卷三)〔言都賀比(万葉)〕

胤ツキ(上平濁) (九条本文選承安点)〔天乃日繼(万葉)〕

胃ツキ(上平濁) (九条本文選承安点)〔次也)〕

從ツイ(平上)而 (金沢文庫本春秋卷十三)〔船辺附而(万葉)〕

周既ツキテ上平〇 (周本紀鎌倉初期点)〔語らむこと都奇めやも(万葉)〕

每ノ竭ツク(上平) (九条本文選承安点)〔万葉)〕

穢ツキス(上上上) (金沢文庫本春秋卷三)〔万葉)〕

託ツク(平上)諸季武子に (金沢文庫本春秋卷十五)〔都氣し紐(万葉)〕

託ツケ(上平)て付也 (九条本文選承安点)〔万葉)〕

矯ツケ(平平)テカ 綱之遺命に (群書治要卷四十六鎌倉期点)〔万葉)〕

繫ツク(上平)於其後 (金沢文庫本春秋二十五)〔語り続(万葉)〕

綱ツイテ(〇平平濁) (古文孝経建久点)〔万葉)〕

〔葉)〕

〔葉)〕

續ツイ(上平)て (群書治要卷七鎌倉期点)

尋ツイ(上平)て 蒐セリ (金沢文庫本春秋卷十八)

尋ツイ(上平)て (帝王略論鎌倉後期点) (「イ」の声点は左中の位)

置)

接ツク(上平濁) (文選弘安本) (「裏も都藝たり (万葉))

相亜ツク(上平濁) (帝王略論鎌倉後期点) (「雁も都藝て来鳴けば

(万葉))

亜ツケリ(〇平平) 春^{シヨツレ}陵 (文選正安本)

襲ツイ(上平)て (呂后本紀延久点)

承ツク(上上濁) 正統に (群書治要卷二十五鎌倉期点)

使嗣ツカ(上上濁) (金沢文庫本春秋卷十三)

磐ツクシ(上〇平) (九条本文選承安点) (万葉)

破^ツ、ミ(平平〇) 九沢を (夏本紀鎌倉初期点) (彼山之堤有海曾(万

葉) 坡^ツ、豆々牟 (新撰字鏡)

唯力ツトメ(平平平)て (金沢文庫本春秋卷六) (万葉)

晨ツト(平上)に (金沢文庫本春秋卷十三) (朝爾行(万葉)

係ツナク(上上平濁) (九条本文選承安点) (万葉)

利^{トキ}、キ(上上濁) 兵を (金沢文庫本春秋卷十三) (剣太刀いよよ刀具

べし) (万葉)

礪^{トク}、ク(上上濁) (群書治要卷七鎌倉期点)

厲^{トカ}、カ(平平濁) シム (群書治要卷七鎌倉期点)

礪^{トケ}、ケ(上上濁) 乃鋒刃を (古文尚書正和点)

疾^{トク}、ク(平平?) (帝王略論鎌倉後期点) (「ト」「ク」共に声点左中にある)

(記)

不漬^{トケ}、ケ(上上濁) (群書治要卷三鎌倉期点) (遂(万葉)

汰^トハシム(上上濁上〇) (裏)トハシ(上上濁上〇) (金沢文庫本春秋二十五)

(「我子登婆之つ (万葉)

徹^トホス(平平上) (金沢文庫本春秋卷十三) (「石根をも通てぞ (万

葉)

関^トラシ(平平〇) (卷山川の風を (斯道文庫蔵古文孝経鎌倉期点)

跡^トメ(平上)て (金沢文庫本春秋卷十九) (留者苦 (万葉)

俱^トモ(上上)に 県 (文選弘安本) (万葉)

收^トトラ(平上平)て (九条本文選承安点) (鳥……等羅倍つ (紀)

号^ナケレ(上平平)トモ (老子応安点) (紀)

其波^ナコリ(平平濁平) (金沢文庫本春秋六) (塩干之名疑 (万葉)

未名^ナツケ(平平上) (金沢文庫本春秋卷二十四) (「名豆気たり (万

葉)

名^ナツケ(上平上) (朱) (礼記宣賢点)

不懐^ナツカ(上平上) (古文孝経建久点) (名付にし奈良乃京(万葉)

無^ナミスル(去平去上法) (古文孝経延慶点) (往方無我為時爾(万

葉)

蓋^ケ…… 辞^ナラシ(上平平) (古文孝経建久点) (万葉)

乗^レ、レ(上平) (論語文永点) (記)

聞^テハ(上平濁) (群書治要卷九鎌倉期点)

聞^テハ(上平濁) (論語嘉曆点)

境^ハラ、ケリ(上上上〇〇) (夏本紀鎌倉初期点) (蹴散、此云俱穢鏡

遲^ハ遅^ハ箇^ハ須^ハ (紀)

転^マロム^テ (金沢文庫本春秋卷二十六) (腹婆布(万

葉)

相承^ウク (九条本文選承安点) (万葉)

日下異ヒクナチ(上上上) (金沢文庫本春秋卷二十八)〔夜具多知

爾寢覺而居者(万葉)。夕日之降(祝詞式)

颯(フ上)ム(平)テ (呂后本紀延久点)〔中爾布敷売流は(万葉)〕

道(フ上)平(上)有功を(夏本紀鎌倉初期点)〔万葉〕

夸(ホコル)上(上)平(上)王(上) (金沢文庫本春秋卷十三)〔万葉〕

正廻マカレリ(上上上) (金沢文庫本春秋卷十四)〔五み麻我理(万

葉)〕

実マサレリ(上上上) (九条本文選承安点)〔万葉〕

相ヒ濟マス(上上) (古文孝経延慶点)〔零者雖益(万葉)〕

夫マスヲラ(平平平)ナリ (遊仙窟康永点)〔万葉〕

性也マ(上)平(上) (古文孝経建久点)〔末多もあはむため(万葉)〕

俣(合点あり)上(上)マ(上)ヒ(上)平(上) (毛詩二南鎌倉期点)〔記〕

除ミチ(上上)に不得有人(帝王略論鎌倉後期点)〔行く美知(万葉)〕

填ミ(平)上(上) (孝景本紀大治点)〔万葉〕

親ミヌカ(平)上(上)平(上) (古文孝経建久点)〔雪毛零奴可(万葉)〕

親ミヌカ(平)上(上) (古文孝経仁治識語本)

親ミヌカ(平)上(上) (古文孝経永安点)

親ミヌカ(上上上) (斯道文庫蔵古文孝経鎌倉期点)

喪モ(平)上(上) (古文孝経建久点)〔母奈久はや来と(万葉)〕

餅モ(平)上(上) (夏本紀鎌倉初期点)〔石平自木丘開道乎(万葉)〕

去モ(平)上(上) (文集卷四嘉禎点)〔於保世母天(万葉)〕

泄モ(平)上(上) (文選弘安本)〔何処漏(キ)てか(万葉)〕淋毛留(新撰字

鏡)〕

諸モ(上)上(上) (古文尚書元徳点)〔万葉〕〔九条本尚書延喜頃

諸モ(上)上(上) (古文尚書元徳点)〔万葉〕〔九条本尚書延喜頃

点)

諸モ(平)上(上) (古文孝経建久点)

燔ヤク(上上) (孝景本紀大治点)〔万葉〕

毀ヤス(上)レ(上)トモ(上)上(上)平(上) (古文孝経建久点)〔万葉〕

未文ヤマ(上上) (金沢文庫本春秋卷十四)〔万葉〕

行邁ユク(上上)謀 (金沢文庫本春秋卷十四)〔記〕

紆(ユ)上(上)平(上) (金沢文庫本春秋卷三)〔万葉〕

命(ヨフ)上(上)平(上)ス(上)道(上)士 (遊仙窟康永点)〔妻欲比(万葉)〕

額(ヨム)上(上)平(上)テ(上) 嗽(上)を (九条本尚書所載鎌倉期点)

畫(エカイ)上(上)平(上) (論語康安点)〔晝爾可伎とらむ(万葉)〕

藻(エカケ)上(上)平(上) (論語康安点)

骨オサ(平)上(上) (文集卷四嘉吉点)〔五十戸長(万葉)〕〔石山本

金剛波若經集驗記)

以(上)往(上)オ(上)チ(上)カ(上)タ(上)上(上)上(上) (古文孝経建治点)〔川の乎知可多に(万

葉)〕

以(上)往(上)オ(上)チ(上)カ(上)タ(上)上(上)上(上) (古文孝経仁仁点)

以(上)往(上)ヲ(上)チ(上)カ(上)タ(上)上(上)上(上) (斯道文庫蔵古文孝経鎌倉期点)

以(上)往(上)オ(上)チ(上)ツ(上)カ(上)タ(上)上(上)上(上)上(上) (古文孝経仁治識語本)

条(上)ヲ(上)上(上) (説(古文孝経仁仁点)〔子ともは乎知許知に(万

葉)〕

条(上)オ(上)チ(上)上(上) (説(古文孝経建久点)

条(上)ヲ(上)上(上) (説(斯道文庫蔵古文孝経鎌倉期点)

触(上)フル(上)絲(上)ヲ(上)ニ(上)上(上) (文選弘安本)〔紐が乎(万葉)〕

声点附和訓と同じ語が、万葉集・記紀以外の、上代文献(注)

2

2

扱アチ上上上上上上 (國点) 竄カケ (文選弘安本) (愕然、於豆 (新撰字鏡))

厭オトス平平上上トナリ (金沢文庫本春秋卷八) (恐嚇、於度須 (同右))

扱オトス上上濁平 (九条本文選承安点)

恐ラト上上濁平之也 (金沢文庫本卷二十九)

威ヲトシ上上上 (國点) (文選弘安点)

瘡オシ上上上 (呂后本紀延久点) (瘡、於不志 (新撰字鏡) 瘡オシ)

(西大寺本金光明最勝王經古点)

霄オホソラ上上平平ニシテ (九条本文選保元点) (天宮、於保曾良)

(新撰字鏡)

椀オホトコ平平平 (金沢文庫本春秋卷十二) (椀、於保土古 (和名抄))

鈎カコ平平群書治要三十四錄倉期点 (鉸具、賀古 (和名抄))

偏カタキ平平平喪 (金沢文庫本春秋卷十八) (上欄「タクヒウシ」ナヘルヲとあり)

(聳、加太支 (新撰字鏡)、对者カタキ (石山寺本金剛波若經集驗記))

頑カタクナ平上上上、リ (金沢文庫本春秋卷二十五) (俱、加太久)

奈 (新撰字鏡)

饑カテノ平上平道 (九条本文選承安点) (粮、加天 (和名抄))

柄カヒ上上濁 (古文孝經建治点) (杓、加比 (和名抄)。杓、斗柄也加比 (新撰字鏡))

柄カヒ上上濁 (古文孝經延慶点)

柄カヒ上上濁 (古文孝經永仁点)

柄カヒ上上濁 (新道文庫藏古文孝經鎌倉期点)

柄カヒ上上濁 (新道文庫藏古文孝經鎌倉期点)

柄カヒ上上濁 (新道文庫藏古文孝經鎌倉期点)

柄カヒ上上濁 (古文孝經元徳点)

象キサ平平濁 (文集卷三正中点) (象、岐佐 (和名抄))

象キサ上上濁 (金沢文庫本春秋卷十七)

轍キシレル平平平 (水を轍アツリ) (文集卷四嘉吉点) (茶研、岐之流 (和名抄))

鍛キタフ上上〇而 (貞観政要卷二建治点) (針支太不 (新撰字鏡))

銘キタ (西大寺本金光明最勝王經古点)

折クシク上上濁平 (群書治要卷十錄倉期点) (詎、久自久 (新撰字鏡))

鑿クツハミ上上濁平 (文選弘安本) (鑿、久都波美 (和名抄))

經クヒレ上上平周本紀錄倉初期点 (縊、久比留 (新撰字鏡))

壁クシリ上上濁上 (文選弘安本) (瑞、師説古之利 (和名抄))

糝コナ之キ平平平 (遊仙窟文和点) (醜、古奈加支 (新撰字鏡))

身ノ幹コハシ平平〇なり (金沢文庫本春秋卷十三) (榼、已波志 (新撰字鏡))

諂コフル上上上上ト (金沢文庫本春秋卷十四) (嫵、媚也、古夫) (新撰字鏡)

寒コイ平上タルカ (古文孝經正安点) (寒鴟、古伊太流止比 (和名抄))

不凍コイ上上平餒 (群書治要卷三十二錄倉期点)

芒サキ上上上 (文選卷三錄倉中期点) (鋸、保己乃乃支 (新撰字鏡))

能聞サカリ上上上上ニシテ (金沢文庫本春秋卷五) (煒、佐加利尔 (新撰字鏡))

蠶サソリ平上上上尾 (金沢文庫本春秋卷二十一) (蠶、波知又佐曾)

利(同右)

鑑子サスナへ(上上平上) (遊仙窟文和点) (鍋、佐須奈戸(新撰字

鏡))

墨ソコ(上平) (金沢文庫本春秋卷十三) (塞、曾古(和名抄))

兵民之残ソコナレ(平平平平)也(金沢文庫本春秋卷十八) (弊、

残也、曾已奈波留(新撰字鏡))

錯タカへ(上上濁平)挙(金沢文庫本春秋卷二) (相授、多加閉之(和

名抄))

以て糞タツクル(平平平平) (群書治要卷三十四鎌倉期点) (種田、田

作(新撰字鏡)。農夫、多都久留平乃去(興福寺本靈異記))

早誓チカフ(上上平) (九条本文選承安点) (視、誓折也、知加不新

撰字鏡))

盟チカフ(上上平) (秦本紀院政期点)

玉瑱ツミイシ(平上上上) (文選弘安本) (柱礎、都美以之(和名抄))

弗才敏トカラ(上平) (古文学経建治点) (保僕、慧也、止之(新撰

字鏡))

高トヒ(上上濁) (文集卷四嘉禎点) (高、止比(新撰字鏡))

詰ナシル(平平上) (金沢文庫本春秋卷五) (詰、奈是留(新撰字鏡)。

詰難(西大寺本金光明最勝王経古点))

箕アハカラ(上上平平)服(周本紀鎌倉初期点) (荆、奈末江乃木(和

名抄))。楷(玄奘法師表啓古点))

蠶ニコケ(上上上) (文集卷四天永点) (蠶、爾古計(和名抄))

蘊ニラキ(平平平濁) (遊仙窟康永点) (蘊、邇良木(和名抄))

槐ノキスケ(上上上濁)アリ (文選弘安本) (槐、乃支須介(新撰字

鏡))

重レル軒ノキスケ(上上上) (文選弘安本)

莠ハクサ(上上濁平) (金沢文庫本春秋卷十九) (莠、波久佐(新撰字

鏡))

長キ鬢ハタ(上上) (文選弘安点) (鬢、波太(和名抄))

弛ハツイ(上上平)弓を(金沢文庫本春秋卷十六) (弛、弓波豆須(新

撰字鏡))

沮ハ、メ(上上濁平) (秦本紀院政期点) (詰、波々女問(新撰字鏡)。

難(西大寺本金光明最勝王経古点))

華(和名抄) (文選正安本) (横、波戸木(新撰字鏡)。

嶺、和名太流岐、楊氏漢語抄云波閉岐(和名抄))

渾ヒチリコ(平平平平) (金沢文庫本春秋卷十三) (泥、和名比知利古

(和名抄))

塗ヒチリコ(平濁平平)ニシ(古文学経建久点)

椛ヒツキ(上上上) (金沢文庫本春秋卷十八) (椛、人木(新撰字鏡))

志フツク(上上平平) (論語卷七文永点) (攀攀、不豆久女利(新撰

字鏡))

束ツナク(上上濁平) (金沢文庫本春秋卷十八) (瑁、保太須(新撰字

鏡))

眺ホトハシル(平平平濁平) (古文学経建久点) (仲、心保止波志留

(同右))

眺ホトハシル(上上濁上濁上) (古文学経建治点) (ハは補入による。別

眺ホトハシリ(上上上上)行ク(金沢文庫本春秋卷二十五)

雲楣マクサ(平上上) (文選正安本) (門眉、万久佐(新撰字鏡))

猥マケ(上上) (出師表院政期点) (穢、万久(新撰字鏡)。杆

(玄奘表啓古点))

渠(ミソ)上(上平輕) (文選弘安本) (溝渠、三曾(和名抄)) (渠(天理
本)金剛波若經集驗記)

溝(ミソ)上(上平) (文選弘安本)
剌(ム)ハラタリ(上上濁上上) (文集卷四天永点) (管実、無波良乃美
(和名抄))

字(ヤ)カス(上上) (虫損) (文選弘安本) (字、夜加須(和名抄))
僕(ヤ)ツカリ(平去上濁平) (遊仙窟康永点) (奴僕、夜豆加礼(和名抄))

余(ヤ) (二荒山碑文)

豚(キ)ノ(上上) (論語卷九康永点) (豚、為乃子(新撰字鏡))
秦(ノ)出(オ)ヒ(上上) (秦本紀院政期点) (甥、平比(和名抄))

声(シ)点附和訓と同じ語が、平安中期天曆期以前(注16)の他の文献
(注17)に認められるもの。

冠(カ)ラシメ(キ)ノ(上上濁上上) (礼記宣賢点) (字、阿佐奈(東大寺図
書館藏法華義疏紙背訓注))

跨(ワ)フト(コ)フル(ト) (上上平濁) (老子康永点) (跨(ワ)フツム(玄奘表啓
「フ」右傍補入)者)

奢(シ)ウ(消カ) (金沢文庫本春秋卷二)
不(フ)為(シ)魁(シ)サフ(上上) (礼記宣賢点) (黄装鳴那梨氣釐(本妙
寺本日本紀竟宴和歌))

直(チ)イ(タ)シ(上上平) (夏本紀鎌倉初期点) (善(セ)普(フ)臻(最勝王経古
点))

碓(ヱ)イ(タ)シ(上上平) (夏本紀鎌倉初期点)
効(キ)イ(タ)シ(獲(エ)モノ) (貞観政要卷十建治点)

效(キ)イ(タ)ス(上上) (金沢文庫本春秋卷十八)

懷(イ)ノ(フ) (上上濁) (ケ)リ (孝景本紀大治点) (懷(イ)ノ(フ) (玄奘表啓古
点))

詩(シ)ニ(云)……瞻(ミ)ル(ト)イ(ヘ)リ(上) (平上平) (古文孝経建久点) (最勝王
経古点)

未(イ)マ(タ)シ(上上平濁平輕カ) (文選弘安本) (尚未(イ)マ(タ)シ(上上平濁平)
本)金剛波若經集驗記)

墳(ウ)コ(モ)テ(上上) (夏本紀鎌倉初期点) (墳(ウ)ク(モ)テ(リ) (尚書延喜
頃点))

陷(ヲ)ト(ム) (上上) (帝王略論鎌倉後期点) (墜(オ)シ(テ) 生死河(最勝王
経古点))

舒(オ)モ(ル) (平) (留(上) 爾(上) (日本紀私記神代下国史大系本))
泊(オ)ヨ(ヒ) (上上平濁) (九条本文選承安点) (單(オ)ヨ(ヒ) (天理本)金剛波若
経集驗記)

弓(ユ)矢(ヤ)を(鍛)カ(タ)シ(上上平) (古文尚書卷十二正和点) (加(カ)太(タ)之(シ)於(ケ)山(ヤ)城(キ)國(ク))
葛(カ)野(ノ)郡(ノ)天(ノ)令(ノ)鑄(ノ)作(三)代(実)録(貞)観(十)二(十)一(十)七) 大(日)本
国語辞典による)

不(フ)肯(カ)ヘ(ン) (平濁平) (論語三正和点卷) (不(フ)肯(カ)ヘ(ン) (十輪経元
慶点))

口(ク)チ(ツ)カ(ラ) (上上平) (古文尚書序正和点) (口(ク)チ(ツ)カ(ラ) (天理本)金
剛波若經集驗記)

羸(ク)フ(サ) (上上濁平) (金沢文庫本春秋卷二十) (不(フ)為(シ)怨(ウ)賊(ノ)所(ノ)利(ト)
(岩淵本)願(ノ)經(四分律)古(点) 大(坪)併(治)博(士)に(よ)る))

羸(ク)フ(サ) (上上濁平) (文選弘安本)

所以(ソ)コ(ノ)ユ(ニ) (平) (書陵部藏臣軌鎌倉期点) (是(ノ)故(ニ)積(迦)

誦私記古点・大坪博士による)

竦ヨツン(上上濁平) (九条本文選承安点) (堅(十輪經元慶点))

臧ヨミセ(上上平〇)は(古文孝経建久点) (嘉(九条本文尚書延喜頃点))

声点附和訓と同じ単語が、日本書紀の古訓に見られるもの。

甘心アマナヒナム(上上上濁平) (遊仙窟康永点) (玖賀媛不和(前

田本仁徳紀古点))

家給ツキ(上平濁) (群書治要卷四十七鎌倉期点) (尚有不給者(前田

本仁徳紀古点))

人給ツク(上平濁) (群書治要卷四十一鎌倉期点)

給ツキ(上平濁)足(古文孝経延慶点)

給ツキ(上平濁)足(古文孝経建治点)

罷マケ平上婦カヘス(呂后本紀延久点) (不御而罷(天理本神代

紀下乾元二年点))

委ユタヌ(上平上) (金沢文庫本春秋卷三) (悉委(東洋文庫蔵推古

紀古点))

委ユタヌ(上上上)之(古文尚書卷九正和点)

縛ユハフ(上平上)一(金沢文庫本春秋卷二十五) (以革穿掌而縛

(北野神社本天智紀古点))

縛ユハフ(上上濁平)て(帝王略論鎌倉後期点)

6 右掲の諸文献に意味語形の同じ語を見ない声点附和訓(各例下の文献の例は参考に挙げたもの)

苜アサラン(上平濁平) (遊仙窟康永点)

渠アセル(上上上)渠(遊仙窟康永点)

○前アナサキ(上平平) (論語嘉暦点) (阿奈宇良(和名抄))

○耐アアナ、メ(上平平) (遊仙窟康永点) (巨耐、和言阿奈禰太(行

歴抄))

○抗アナシ(上平上)殺ツ(秦本紀院政期点) (抽取(天理本金剛波若

経集験記)) 填ウコモチ墟アラシ(上上〇) (夏本紀鎌倉初期点)

○青驪アツクロ(上上上)ナリ(夏本紀鎌倉初期点) (青紺、阿乎爾(常

陸風土記、行方))

○夷ウスキ(上上濁)にして(論語康安二年点) (蹲(小川本願經

四分律平安初期点))

○数カスナフ(上平濁上〇) (金沢文庫本春秋卷二十) (坐(天理本

金剛波若経集験記))

○櫛カチモノ(上平平〇)を(金沢文庫本春秋卷三) (踊(同右))

搔カラムテ(上上上) (九条本文選承安点)

搔カラムテ(上上上) (六臣注文選承安点)

毛ケフク(上上濁)ナリ(金沢文庫本春秋卷十八)

○開情コ、ロツキ(上平濁平) (遊仙窟康永点) (悸、去々呂津古支之

(興福寺本靈異記)。精神(天理本金剛波若経集験記))

○扶(口)シヒ(上平濁)て(金沢文庫本春秋卷十五) (取杖扶(同

右))

以て蕪コエス(上平上) (群書治要卷三十四鎌倉期点)

折サハキ(上平濁)其の理を(貞観政要卷六建治点)

尊シキネ(上上平)に(金沢文庫本春秋卷十八)

○肉シ、ツケム(上平濁平)之(金沢文庫本春秋卷二十三) (六(西域記長寛点))

○肉シ、ツケル(上平平)ナリ骨に(金沢文庫本春秋卷十六)

○醜シヒトリ(上平平) (文選卷三鎌倉中期点) (強語(万葉))

批政シヒナ、ル(上上上)マツワリコト(貞観政要卷五建治点)

- 高トヒハ措スツテ(平)入瀆上 (文集卷四嘉禎点)
 狂ソホレ(上)瀆平)タルニ風 (遊仙窟康永点)
 次ヲコリ (平)上瀆) 侈ヲコレリ (平)上瀆) (金沢文庫本春秋卷十九)
 ○弗サルニ地チタモタ(平)上平)上 (金沢文庫本春秋卷二) (保) (最勝王経古点)
 四^ニ汪ツイテ(平)上上)て (遊仙窟康永点)
 約ツ、マカシ(〇〇)上平)〇 (孝文本紀延久点) (縮) (法華経玄贊卷六平安中期点)
 約ツ、マカシ(〇〇)上平)〇 (孝文本紀延久点) (新撰字鏡)
 ○時トキナフ(平)平)〇 (金沢文庫本春秋卷十三)
 刑ツクトス(〇〇)上平)上 人力 (貞観政要卷四建治点)
 署ナン(上)上)テ名 (貞観政要卷一建治点)
 秘ナヒ(上)上)たる思を (九条本文選卷一)
 妖ハケテ(平)瀆)上平) (文集卷四嘉禎点)
 ○杠ハタエ(上)上)上)ヒ糸 (礼記卷二宣賢点) (鹿、波太(新撰字鏡))
 ○燿ヒキエヌ(平)上平)上) (金沢文庫本春秋卷二十五) (燿、火介知平佐牟(同右))
 耦ヒトコロフ(上)上)〇)平) (金沢文庫本春秋卷一) (黨) (西域記長寛点)
 以て鉞ヒヲキ(平)平)平) (金沢文庫本春秋卷二十六)
 緝フキ(上)平)テ蒲 (金沢文庫本春秋卷二十)
 顧ヘカラシ(平)平)上平) 鋭 (文選卷三鎌倉中期点)
 ○老ト悖ホケ(平)瀆)平)て (金沢文庫本春秋卷七) (祝) (天理本金剛

波若経集験記)

- 観マノサノ(平)平)平) (卷) (六臣注文選応永点)
 泥ノ滓トミンコレリ(〇)上)上)上)〇) (文選卷三鎌倉中期点)
 ○娶メトル(上)上)〇) (夏本紀鎌倉初期点) (妻、米阿波須(和名抄))
 用モチ^〇(平)上)上) (毛詩二南鎌倉期点)
 恨モトリ(上)上)瀆)平) (古文学経建久点)
 恨モトリ(平)平)瀆)上) (卷) (斯道文庫蔵古文学経鎌倉期点)
 恨モトレリ(平)平)上)平) (金沢文庫本春秋卷十八)
 繋ヤマクハノ(平)平)平)平) 脈ユミ (周本紀鎌倉初期点)
 交ヨシヒ(平)平)上)瀆)ヲ (史記卷十八実録書写本)
 彼レ宗ヨ、カラ(上)上)上)平) (金沢文庫本春秋卷十)
 吾儕ワナミ(平)平)平)ノ (春秋経伝集解保延点)
 吾儕ワナミ(上)瀆)或説ワナミ(平)上)平)ノ (春秋経伝集解保延点)
 吾儕ワナミ(平)平)平)ノ (金沢文庫本春秋卷十九)
 吾儕ワナミ(平)平)平)ノ (金沢文庫本春秋卷十六)
 ○幹キケタ(平)平)瀆)上) (九条本文選承安点) (架) (天理本金剛波若経集験記)
- 文献の上に証拠を得ない語が五十六例あるが、この中、複合語や接尾辞を持つ単語では、同種の語構成が文献に見られるもの、又はその構成要素の1が文献に見られるもの十八例(〇印)が含まれる。之を除くと、文献に証拠が得られない語は、四一六例中の約一割である。この一割の中に、後世新たに生じた語彙・語法があるを検するに、唯一例、「モチウ(用)」が挙げられるが、「ウ」の仮名は字形に疑が残るので、結局、確例としては、後世成立の語は認められないことになる。さすれば、平安後期以降の漢籍に見られる声点附和訓は、いずれも、平安初期(中期では古辞書等)以前に用いられた

言語であつて、後世になつて成立した言語では無いことが分る。

四、漢籍における声点附和訓の特異性

漢籍における声点附和訓は、平安後期以後の点本に見られるものであるにも拘らず、それらが皆平安初期以前の言語と連繋があることが判明した。とすると、これらの和訓は、その加点了れた時期の一般の言語と比較して、何らかの相違があるのではないかと推測される。そこでこの推測を検する為に、先ず雅言集覧・色葉字類抄(三卷本)と比較してみる。共に平安時代語を中心として一定の意図のもとに語彙を蒐集したものである。

一、雅言集覧と漢籍の声点附和訓との比較

(イ) 雅言集覧に見られない声点附和訓

- | | | |
|--------------|------------|------------|
| アゴエ(距) | アザ、(符) | アザナツケ(字) |
| アザラシ(符) | アセル(穢) | アナサキ(前) |
| アナ、メ(呵耐) | アナンシ(抗) | アワダコ(膺) |
| アヘシ(蹙) | アラシ(墟) | アヲクロ(青驢)ナリ |
| イサヲ(魁) | イチツラ(肆) | イマダシ(未) |
| ウコモテリ(墳) | ウズキ(夷)ニシテ | |
| トコトニオコレリ(警辨) | ヲノ(吁) | |
| オフシ(瘡) | オモムルニシテ(舒) | カズナフ(数) |
| カタシ(銀) | カチモノ(撻) | カナシヒ(哀) |
| カハ(廁) | カヘンセ(不肯) | カンバタ(綺) |
| キル(鬪) | クダツ(日側) | クチヅカラ(口) |
| クブサ(羸) | ケブク(毛)ナリ | ロジヒテ(扶) |
| コジリ(瓊) | コナキ(糝) | コノユヘニ(所以) |

- | | | |
|------------|-------------|-------------|
| コハシ(幹) | コブル(詔) | コモく(交) |
| コイタルカ(寒・凍) | コエス(蕪) | |
| コロス(承) | サカタむ(解蠶) | サキ(陔) |
| サクリ(決) | サスナベヲ(鑿子) | サソリ(蠶) |
| サヘニ(助詞) | シカス(如之) | シキネ(尊) |
| シ、ツケム(肉之) | シ、ツクルナリ(肉骨) | |
| シナス(衰) | シヒトリ(贖) | |
| スガリテ(夜纏) | スツテ(高摺) | スベテ(揃凡) |
| ソグニ(降斂) | タカビ(自高) | タカビテ(亢) |
| タツクル(蕪) | タナビ(汰・侈) | タへテ(要・微) |
| タフ(微・邀) | タフサム(斃) | 巫医(巫) |
| チタモタズ(弗地) | ツイツ(第) | ツガヘテ(相耦) |
| ツギ・ツグ(給) | ツ、マカシ(約) | ツ、マカシ(約) |
| ツ、ミ(陔ニ九沢) | ツエ(弊) | ツミイシ(玉瑱) |
| トキナフ(時) | トゲズ(不漬) | ナシテ(署) |
| ナビたる(秘思) | ナマエ(箕) | ナミスル(無) |
| ナラシ(助動詞) | ナラヘル(饌民) | ニコゲ(蠹) |
| ニラギ(瘧) | ノキスケ(軒・椽) | ハタエ(杠) |
| ハヘギ(樓) | ハラ、ケリ(壤) | ヒキエヌ(燿) |
| ヒイテ(承) | ヒクダチ(日下吳) | ヒヂリコニシ(塗・渾) |
| ヒトコロフ(耦) | ヒヲキ(斂) | フツクム(患) |
| フキテ(蒲) | ヘカラン(視) | ボケテ(悖) |
| マガレリ(廻) | マクサ(雲楨) | マク(罷) |
| マタゲリ(速) | マメサメ(覬) | ミノコレリ(泥滓) |
| ミヌカ(親) | ムベナフコト(肯) | メトル(娶) |

モテ(去) モドリ(低) モトレリ(復)
 ヤカス(宇) ヤザシ(吝) ヤフサカ(ナ)ラハ(恠)
 ヤマクハ(慶) 派 (ヤマワシから(不疚) ユハフ(縛)
 ヨイ(余) ヨコタ(衡) ヨシビヲ(交)
 ヨブス(命) ヨダツ(疎) ヨミセは(臧)
 ヨ、カラ(宗) ワナミ(憤) キゲタ(幹)
 エカイテ(画) エカケ(藻) オチツカタ(以往)
 ヲチ(条) (存疑)刑ヲトス

(回) 雅言集覧にあるが、その用例が上代文献、平安中期以前の古辞書や和歌・訓点資料、日本書紀古訓のみのもの。(一)内が雅言集覧の出典

アキタル(嘆)〔万六十五・廿十一〕
 アフドコブル(跨)〔文選、九〕 アラク(宣)〔散、神代紀〕
 オブ(佩)〔万十七、九外〕 オホトコ(椽)〔柳、日本紀〕
 カタ(瀉)〔和名抄、万〕
 キザ(象)〔和名抄、文選七・拾遺物名〕
 キシレル(輾)〔白氏文集、夫木〔夫木ハ文集ニ出ツ〕〕
 クジク(折)〔白氏文集〕 クヒレテ(經)〔天武紀・神代紀〕
 タムムキ(腕)〔和名抄・神代紀・記・仁徳紀〕
 ツトに(長)〔万、白氏文集〕 ナジル(詰)〔新撰字鏡・本朝文粹〕
 ナツケズ(未名)〔万、古今物名、古今序〕
 ハタ(髻)〔鑑、神代紀・和名抄・文選〕
 ハバメテ(沮)〔礼記、史記〕
 ハラバヒシ(転)〔詩大雅、神代紀、万十九〕
 (フ)フムテ(噫)〔万、神代紀上〕

モシ(誅)〔統紀〕
 ヤツカリ(僕)〔遊仙窟、神代紀上〕○此詞延喜よりこなたにはをさをさみえす
 ヲニ(統)〔等、万十一・十三、和名抄〕
 ユダヌ(委)〔日本紀〕

雅言集覧は国語学辞典(築島裕博士解説)によれば「平安時代のかな文学書を中心とし(略)収集範囲が広く、古代国語のほとんど全語彙を網羅」しているとされる。一方、声点附和訓の延べ例数は四一六例であるが異なり語数は三一四例(漢字まで同一なもの三十三語八十六例)である。右掲の(イ)雅言集覧に所載のない語、(回)雅言集覧の例が平安中期以前の例のみものの合計が一五三例であるから、声点附和訓の約半数は、かな文学書を中心とした文献に所見のない語となる。

二、色葉字類抄(三卷本)と漢籍の声点附和訓との比較
 残る半数(雅言集覧のかな文学書等に所見のある語)について、その語と漢字との対応について調べる為に、三卷本色葉字類抄と比較すると次の如き結果が得られた。

(イ) 声点附和訓と同訓であるが、その和訓に対応する漢字が、三卷本色葉字類抄には見られないもの。(一)内が漢籍の声点附和訓の漢字、「」内が色葉字類抄の漢字を示す
 アク(晨)〔明〕 アザレテ(餒)〔餒アザル(黒川本)〕
 アシカ(遺)〔箭など〕 アツカラ(不腆)〔原・敦・濃など〕
 アフイデ(煽)〔*扇・吹・簸・翔〕
 アブレテ(播)〔*溢など〕 イケニ(三性)〔儀イケニ、性イケニ〕
 イタス(虐・妬・効・效)〔*致〕 イダス(墮)〔輪〕
 イヅクシ(熟)〔*蔽・莊・宗〕 イナビズ(不肯)〔*辞〕

イヌ(逝)〔*去・徂・往〕

イルハカリ(函文余)〔*入……函……〕

オゴレリ(據)〔傲など〕

オトシム(陥)〔貶・憐・摠〕

オホスル(行)〔被・負など〕

カガメテ(局)〔*屈・*曲・*句など〕

カ、ラ(鉤)〔*繫〕

カゴ(鉤)〔*鉸具・*玉鉤など〕

カハラ(論)〔*替など〕

カラムテ(搔)〔*擽・*搦など〕

コ、ロツキ(開情)〔*管、*ロツキ〕

サカリニシテ(能聞)〔*盛、*カサリなど〕

サトス(譚)〔論〕

シク(藉)〔*敷など〕

スギタリ(実)〔*過、*スガなど〕

セム(求)〔*逼、*ムなど〕

タカラ(厲)〔*宝、*タカラなど〕

タマレリ(有水)〔*溜、*タマレなど〕

ツギ(胤・胄)〔*次、*ツギ・*継など〕

ツク(繫)〔*系、*ツクなど〕

トバシム(汰)〔*飛、*トバシムなど〕

ナケレトモ(号)〔*泣、*ナケレなど〕

ヒツキ(楛)〔*楛、*ヒツキなど〕

マサレリ(実)〔*増、*マサレなど〕

トイヘリ(謂)〔ラ〕

ヲチ(扱)〔*惶・*憚など〕

オドス厭(恐)〔*威・*扱など〕

カノ(匪)〔鹿カ〕

カキ(壘)〔障・垣など〕

カテ(饜)〔*粮・*糧など〕

カヘ(不施)〔*替、*カヘ〕

キカズ(不肯)〔聞など〕

シキリニ(頭)〔*頻、*シキリなど〕

シリヘに(内)〔後、*シリ〕

スギ(送)〔*過など〕

タガフルソ(冒)〔違など〕

タビ(行)〔旅、*タビなど〕

ツイデ(綱・徒)〔次など〕

ツキテ(既)〔*尽、*ツクなど〕

ツクシ(罄)〔*尽、*ツク、*罄など〕

トグ(厲)〔*礪、*トグなど〕

トメテ(跡)〔*認、*トメ、*平上など〕

ナラヘ(放)〔*習、*ナラ、*放など〕

フム(道)〔*蹈、*フムなど〕

マス(濟)〔*益、*マスなど〕

マ斯拉ヲナリ(夫)〔丈夫、*マスラ〕

マタ(也)〔又、*マタなど〕

ヤマ(未文)〔息、*ヤマなど〕

オヒ(出)〔甥、*オヒなど〕

(一) 声点附和訓と同一訓が三卷本色葉字類抄に見られぬもの。

アタシ(他) アブサズ(不益) カケ(音)

カク(称) カタキ(偏) カタクナ、リ(頑)

キタフテ(銀) コ(米) サバキ(折)

欲(速、*キヤシヤシ) ソポレタルニ(狂) ツイデ(即・序・班)

トホス(徹) トロシ(関) モチ(用)

オチカタ(以往)

(一)合せて八十例であるから、一六一例中の半数は、漢籍の声点附和訓と漢字との同じ組合せが、色葉字類抄には見られないことにならる。色葉字類抄は「平安時代末期を中心とする国語のうち普通漢字によって表記する習慣のある語を徴すべき絶好の文献」(国語学辞典山田忠雄氏解説)とされ、実際に、例えば「アツム」には「集」以下「春・・」の如く七十字を掲げる如く一和訓について多くの漢字を掲出してある。にも拘らず、声点附和訓と漢字を同じくしないものが二分の一も存するのは注意される。

(二) 声点附和訓の漢字と、色葉字類抄のそれとが一致するもの(片仮名の和訓の下の)内が漢籍の声点附和訓の漢字、その下が色葉字類抄の漢字 (字類抄の方の漢字に(一)があるのは黒川本の例)

アカイテ(蹀) 蹀、馬走 アカタム(頒) 頒、六班

アギトウ(照) 照、已上同 アザムキ(誑) 誑……已上欺也

アタテハ(中) 中、ヲラヒ也 アタラシマ(不措) 措、ヲラシマ

- アマナビナム(甘心) *甘心アツカシ
- アラシヤ(有心) *有アツ
- イダス(輸) *輸イダス又イダス出也
- イハフ(祝) *祝イハフ
- ウカ、ハ(使間) (間) *使間ウカハ
- オゴレリ(傲・奢・侈) *傲オゴレ
- オブ(佩) (佩) *佩オブ
- オヨビ(泊) (泊) *泊オヨビ
- カク(闕) (闕) *闕カク
- カビ(頰) (頰) *頰カビ
- カヘサフ(復・覆) *復カヘ又*覆カヘ
- カリ(芟) (芟) *芟カリ
- キズ(疊) (疊) *疊キズ
- クツバミ(鑿) (鑿) *鑿クツバミ
- サカリ(辟) (辟) *辟サカリ
- サハ(照) (照) *照サハ
- シヌ(死) (死) *死シヌ
- スサビ(不荒) (荒) *荒スサビ
- ソコ(墨) (墨) *墨ソコ
- タガ(錯) (錯) *錯タガ
- タムムキ(腕) (腕) *腕タムムキ
- タテマツル(上) (上) *上タテマツル
- タムロ(局) (局) *局タムロ
- チカフ(誓・盟) (誓・盟) *誓チカフ又*盟チカフ
- ツイデ(次・統・續) (次・統・續) *次ツイデ又*統ツイデ又*續ツイデ
- アラハス(著) *著アラハス
- アワ(齧) (齧) *齧アワ
- イダケリ(懷) *懷イダケリ
- イロドル(應) (應) *應イロドル
- オドス(威・撰) *威オドス又*撰オドス
- オホソラ(霄) (霄) *霄オホソラ
- カク(竊) (竊) *竊カク
- カビ(柄) (柄) *柄カビ
- カヘテ(淪) (淪) *淪カヘテ
- キケ(聽) (聽) *聽キケ
- キ(セ)シム(衣) (衣) *衣キ
- ゴトニ(每) (每) *每ゴトニ
- サキ(芒) (芒) *芒サキ
- シツメリ(淪) (淪) *淪シツメリ
- シバシバ(驟) (驟) *驟シバシバ
- スベテ(凡) (凡) *凡スベテ
- ソコナハレ(殘) (殘) *殘ソコナハレ
- タガヘストキには(耕) (耕) *耕タガヘ
- タチ(退) (退) *退タチ
- タフレタル(狂・瘕) (狂・瘕) *狂タフレタル又*瘕タフレタル
- タレガ(誰) (誰) *誰タレガ

- ツク(竭・殫) (竭・殫)
- ツグ(接・尋・亞・襲・承・嗣) (次・接・尋・亞・襲・承・嗣)
- ツトメテ(力) (力) *力ツトメテ
- トグ(利) (利) *利トグ
- トビ(驚) (驚) *驚トビ
- トラへて(収) (収) *収トラへて
- ナツカ(不懷) (懷) *懷ナツカ
- バケテ(妖) (妖) *妖バケテ
- ハツイテ(弛) (弛) *弛ハツイテ
- ホコル(夸) (夸) *夸ホコル
- ホドハシル(跳) (跳) *跳ホドハシル
- マヒ(舞) (舞) *舞マヒ
- ミツ(填) (填) *填ミツ
- モ(喪) (喪) *喪モ
- モロく(の) (諸) (諸) *諸モロく
- ヤスレトモ(毀) (毀) *毀ヤスレトモ
- ユルフ(紆) (紆) *紆ユルフ
- オサ(骨) (骨) *骨オサ
- ツク(託) (託)
- ツグ(礪) (礪) *礪ツグ
- トク(疾・敏) (疾・敏) *疾トク又*敏トク
- トモに(俱) (俱) *俱トモに
- ナゴリ(波) (波) *波ナゴリ
- ノレ(乘) (乘) *乘ノレ
- ハグサ(莠) (莠) *莠ハグサ
- フルヘリ(奮) (奮) *奮フルヘリ
- ホダス(束) (束) *束ホダス
- マケテ(猥) (猥) *猥マケテ
- ミゾ(溝・渠) (溝・渠) *溝ミゾ又*渠ミゾ
- ムバラ(刺) (刺) *刺ムバラ
- モリ(泄) (泄) *泄モリ
- ヤク(燿) (燿) *燿ヤク
- ユク(邁) (邁) *邁ユク
- キノコ(豚) (豚) *豚キノコ

此の両者一致する例について仔細に見ると、色葉字類抄(前田本のみ。黒川本を除く)は此の漢字に合点(*印で示した)を加えてあるものが目立つ。

三卷本字類抄の跋文によると、「抑詔貢士有成入道詞字少々加朱点為要文不迷也、件人久学杏檀之風忽入桑門之月、稽古有勤其說不信哉……」とある。築島博士の教示によると、この「朱点」は合点をさし、「貢士」「久学杏檀之風」より考えて、漢籍の訓等によりその典

拠を示したものとされれる。合点のあるのは前田本の方だけであるから、対象となるのは、右掲の中、五十四例であるが、その中、二十六例に合点がある。三巻本字類抄の中には、明かに漢籍の訓読と見られるものが存している。

(字類抄)

時勢粧イマヤウサケ (上一五〇)

諸捨シヨツセ (下二二〇)

(古点本例)

時勢粧イマヤウサケ (白氏文集卷三天永四年点)

山イマヤウサケ川カハ其シ舎カ諸シヨツセ (論語卷三建武四年点)

反語形を「已然形＋ヤ」で表わすのは、漢籍訓読語の特徴である(訓点語と訓点資料二十九輯拙稿)。右は一・二の例であるが、之によると、合点附和訓が声点附和訓と一致するのは、字類抄が漢籍の訓しかも典拠ある訓を明示したもので、それが声点附和訓の性格と一致したことを示すものであろう。但し、字類抄の合点は「少々」であつて恐らく同性格のもの全てにわたらないであらう(右の二例にも合点はない)。さすれば残る二十八例に合点がないのも偶然かも知れないのである。

以上によると、(a)声点附和訓は、平安時代のかな作品等では一般に用いられない語である場合、(b)声点附和訓は、その和訓が漢字との組合せにおいて、当時の普通漢字による表記習慣と異なる場合、(c)当時の漢字による表記習慣と一致するが、特に漢籍読等で典拠あると見られる場合を示すと考えられる。量は、(a)(b)が極めて多い。とすると、声点附和訓の多くは、当時何らかの点で特異なもの、従つて注意すべきものとされていた和訓と考えられる。観智院本類聚

名義抄の和訓と漢籍における声点附和訓との比較については後述するが、両者の声点附和訓の一致するものは二百二十六語句数えられる。此の数が色葉字類抄と大差のあるのは、名義抄の和訓には漢籍の訓を多く採用しているからである。にも拘らず、両者が漢字まで一致するのは一二八語句で、残る九十八語句約 $\frac{1}{2}$ は、漢字と和訓との組合せが一致しない。このことも、声点附和訓の性格を考える上に注目してよい事実である。

次に、声点附和訓の存する時期の、漢籍以外の訓点資料の和訓と比較する。この種の訓点資料の用例集の公刊されていない現状では、広く比較してその過程を示すことが出来ないが、幸いに、興福寺本大慈恩寺三蔵法師伝(慈恩伝)古点十卷の訳文と総索引とが築島博士によつて公刊されたから、これと比較することにより、その一斑を知ることが可能である。

先ず、声点附和訓の漢字と、同漢字を慈恩伝古点に拾うと、二七字が数えられる。その中一七三字は、和訓が一致しない。和訓の一致するのは $\frac{1}{4}$ に過ぎない。

(一)、漢籍の声点附和訓と慈恩伝古点とが漢字は一致するが、和訓の一致しないもの。(各漢字の下、小字の片仮名は慈恩伝古点の和訓を示す)(和訓のない際にのみ「意……」を示す)

頒アハカヌ (ワカツ)

晨アサ (アシタ)

字アザナ (アザナ)

越アサシ 人コヒト (コヒト)

惜アタラシ (アタラシ) ・ ヲシ (ヲシ) ・ ヲシム (ヲシム)

坑アナ (アナ)

前サキ (サキ) ・ ススム (マヘ)

音ミツ (ミツ)

滋アブル (アブル) ・ ミツ

奇オドロク (オドロク) (音) ガク

播アツレヒ〔ホドコス〕 甘心アツキヤク〔甘アマシ・ネムゴロ〕

宣アツク〔ノタマフ・ノブ(上二・下二)〕

魁イサヲ〔タクマシ〕 熟ウツクシ〔音〕ジク・ジユク

肯イフヒ〔アフ・カフ〕 逝イヌ〔サル・ユク〕

祝イハヒ〔音〕シウ・シク 未イマダシ〔イマダ・ザリ・ジ・ズ〕

函イハカリ〔ハコ〕 間ウツマハ〔アヒダ・ヘダツ・ママ〕

墳ウコモノリ〔音〕フン 夷ウズキニシヒ〔タヒラカ・タヒラグ・ヒトシ・ヒトシクス〕

傲オコレリ〔音〕 奢オレル〔音〕ジヤ

撰オラチオトス〔トル〕 陷オトシム〔オチイル〕

厭オトス〔イトフ〕

恐オソヤ〔オソル・オソルラクハ・オツ〕

行オホスル〔オコナハル・オコナヒ・オコナホル・カチヨリ・タビ・ツラナル・ユク〕

霄オホツラ〔ソラ〕 舒オホムルニシテ〔ノブ(上二・下二)〕

鈎カハラ〔音〕コウ 驚オカ〔音〕

闕カクテ〔カク(下二)・ツカサ〕 音カケ〔オト〕

称カケ〔イハク・イヒシク・イフ・カナフ・ハカリ〕

数カスナフ〔アマタ・カズ・シバシバ〕

偏カクキ〔ヒトツ・ヒトヘ〕 撼カクモノ〔音〕セフ

匪カク〔アラズ・ズ〕 廁カク〔マジハル〕

柄カビ〔エ〕 不施カク〔オク・ホドコス〕

復カハサフ〔カヘリテ・カヘル・マタ〕

覆カササフ〔オホフ・クツガヘス・クツガヘル・コボス〕

不肯カカス〔アフ・カフ〕 象カク〔アラハス・シルシ〕

衣キ〔キル・コロモ〕 折カク〔サク(四段・ヲル)〕

日側カタク〔カタハラ・ソバタツ(四段・下二)・ホトリ・ホノカ〕

来キタス〔キタラク・キタリ・コノカタ〕

毛キウ〔音〕モウ 開情キウ〔開ヒラ(四段・下二)〕

幹コハシ〔モト〕 糞コエ〔クソ〕

承コス〔ウク・ウケタマハル・カウブル〕

解コト〔サトル・シル・トク(四段・下二)〕

僻カカリ〔タガフ〕 闕カカリニシテ〔セメグ〕

決ケツ〔音〕クエツ 諷カトス〔音〕フウ

折カク〔サク(四段・ヲル)〕 如シカス〔イフナラク・ゴトシ・シク・モシ〕

頭ケリ〔アキラカ・アラハ・アラハス・アラハル〕

肉クニ〔音〕ニク 衰カヘ〔オトロフ〕

内ウチ〔イル(下二)・ウチ〕

実マコト〔マコト・マコトニ・ミツ(四段)〕

迭マカヒ〔音〕 不荒マカヒ〔オホフ〕

求モトム〔音〕 狂マカヒ〔クルフ〕

高タカサ〔音〕タカシ 錯マカヒ〔錯(フ)コト〕

属タカサ〔音〕レイ 遏マカヒ〔音〕ア・カ

弥タカサ〔音〕上二段・ツクス・ホロボス 侈マカヒ〔オゴル〕

糞マカヒ〔クソ〕 邀マカヒ〔サイギル〕

要マカヒ〔音〕エウ

狂マカヒ〔クルフ〕 有水マカヒ〔アラユル・アリ・アルイハ・イマス・タモツ〕

弗地マカヒ〔音〕チ 即マカヒ〔名〕(スナハチ・ツク(四段))

序^シツ^ツチ^チ (ツグ・ノブ(下二段)) 班^ハイ^イチ^チ (アカツ・アガフ)

第^{ダイ}ツ^ツツ^ツ (音) テイ

胤^イツ^ツ (タネ)

胃^イツ^ツギ^ギ (音) チウ

既^イツ^ツキ^キ (ステニ)

竭^{ケツ}ツ^ツモ^モ (ツカル・ツク(上段)・ツクス)

殲^{セン}ツ^ツキ^キ (ツクス・ホロボス)

繫^{ケツ}ツ^ツク^ク (ツナグ)

綱^{コウ}ツ^ツイ^イチ^チ (音) カウ

從^{ジュウ}ツ^ツツ^ツ (シタガヒテ・シタガフ(四段)・下ニ・ヨリ・ヨル)

接^{ケツ}ツ^ツク^ク (マジハル)

襲^{ウツ}ツ^ツツ^ツ (オソフ・カサス)

承^{ジョウ}ツ^ツク^ク (ウク・ウケタマハル・カウブル)

給^{キツ}ツ^ツク^ク (アマネシ・イトマアキツク・タマフ)

約^{ヤク}ツ^ツツ^ツ (セバセバシ・ツツマヤカ・ツツマル)

破^ハツ^ツ (音)

力^{リキ}ツ^ツツ^ツ (チカラ・トドム)

晨^{シン}ツ^ツツ^ツ (アシタ)

係^{ケツ}ツ^ツツ^ツ (カカツラヒ)

弊^{ヘツ}ツ^ツ (ツヒユ)

時^{トキ}ツ^ツツ^ツ (トキ・トキドキ・トキニ・ヨリヨリ)

利^リツ^ツ (音) リ

厲^リツ^ツ (音) レイ

不^フツ^ツツ^ツ (不潰ツヤ)

弗^{フツ}ツ^ツ (音) ビン

刑^{ケイ}ツ^ツツ^ツ (音) ケイ

徹^{トウ}ツ^ツツ^ツ (トホル・ヲハル)

関^{カン}ツ^ツツ^ツ (アツカル)

跡^{アト}ツ^ツツ^ツ (アト)

収^{ウツ}ツ^ツツ^ツ (ノゴフ・ヲサマル・ヲサム)

号^{ガウ}ツ^ツツ^ツ (音) ナ

詰^{ツメ}ツ^ツツ^ツ (音) キチ

波^ハツ^ツツ^ツ (音) ナミ

秘^ヒツ^ツツ^ツ (音) カクス

箕^ヒツ^ツツ^ツ (音) キ

無^ムツ^ツツ^ツ (音) ナカレ・ナケム・ナシ

放^{ホウ}ツ^ツツ^ツ (音) ハナツ・ユルス

霏^ヒツ^ツツ^ツ (音) ゼイ

軒^{ケン}ツ^ツツ^ツ (音) ノキ・クルマ

妖^ウツ^ツツ^ツ (音) エウ

沮^{ジュ}ツ^ツツ^ツ (音) ノ

壊^{クワイ}ツ^ツツ^ツ (音) ジャウ

転^{テン}ツ^ツツ^ツ (ウタタ・マロフ・メグラス・メグル)

承^{ジョウ}ツ^ツツ^ツ (ウク・ウケタマハル・カウブル)

塗^ツツ^ツツ^ツ (ヌル・ミチ)

道^{ドウ}ツ^ツツ^ツ (イフ・ミチ)

緝^{キツ}ツ^ツツ^ツ (音) シフ

悖^{ハイ}ツ^ツツ^ツ (音) ハイ

夸^{クワ}ツ^ツツ^ツ (音) ガク

束^{ソク}ツ^ツツ^ツ (音) ショク・ソク

廻^{クワ}ツ^ツツ^ツ (カヘル・メグラス・メグル)

罷^ヒツ^ツツ^ツ (シリゾク・ヤム(四段)・下ニ)

猥^{ワウ}ツ^ツツ^ツ (ミダリ・ミダリガハシ)

実^{ジツ}ツ^ツツ^ツ (マコト・マコトニ・ミツ(四段))

济^ジツ^ツツ^ツ (スクフ・ワタス・ワタル)

夫^フツ^ツツ^ツ (カナ・カノ・コノ・ソレ・ヲフト)

也^ヤツ^ツツ^ツ (音) ソ・ナリ・ヤ

鯢^スツ^ツツ^ツ (音) コウ

泥^ニツ^ツツ^ツ (泥(ヒチリコ))

除^{ジョ}ツ^ツツ^ツ (ノゾカル・ノゾク・ノゾル・ハシ・ハラフ・ヨル(寄))

覩^コツ^ツツ^ツ (音) ミユ・ミル

刺^シツ^ツツ^ツ (音) シ

肯^{ケン}ツ^ツツ^ツ (アフ・カフ)

用^{ヨウ}ツ^ツツ^ツ (ツカフ・モチキル・モテ・モテス)

去^{キョ}ツ^ツツ^ツ (イヌ・サク・サル・シリゾク(四段)・下ニ・スツ・ユク)

字^ジツ^ツツ^ツ (音) イヘ

毀^{クイ}ツ^ツツ^ツ (ソコナフ・ソシル・ヤブル(四段)・下ニ・ヤル)

僕^{ボク}ツ^ツツ^ツ (音) ボク

不^フツ^ツツ^ツ (音) ヤム

未^ミツ^ツツ^ツ (音) ガイ

邁^{マイ}ツ^ツツ^ツ (音) アキラカ・スグ・ミガク

委ユキ (クハシ・スツ・タグフ・ツブサニ・マカス)

縛ユキ (音) (バク) 術ヨシ (ハカリ)

交ヨシ (コモゴモ・コモゴモニ・マジハル・マジフ)

疎ヨシ (アガル・ソビユ) 宗ヨシ (アガム・タフトブ・ムネ)

幹ヨシ (モト) 藻エタ (アヤツル・カク・フムデ)

絲ツ (イト) 以イ (往オチオチカク (往イサキ)

条アチ (音) (デウ) 出オ (イダス・イツ)

この不一致の理由を調べる為に、右掲の漢字について観智院本類聚名義抄所載の和訓と比較すると、「頒アカツ・ワカツ」の如く両訓を併載するものもあるが、観智院本類聚名義抄所載の右掲漢字に一方の和訓が収載されていない場合には、無い訓が漢籍の声点附和訓の方であることが圧倒的に多い。例えば、第一音節が「ア」の和訓についてみると、

(漢籍の声点附和訓)

(慈恩伝古点の和訓)

字 アザナツケ (名義抄に) アザナ (名義抄に)

越 アタシ (なし) コユ (あり)

惜 アタラシム (なし) アタラシ・ヲシム (あり)

前 アナサキ (なし) サキ・ススム・マヘ (あり)

抗 アナンシ (なし) アナ (あり)

溢 アブサ (ズ) (なし) アブル・ミツ (あり)

宣 アラク (なし) ノタマフ・ノブ (あり)

の如くである。此は、漢籍の声点附和訓が、特異なものである面を持つ一証と考えられる。同時に漢籍訓読語の性格の一面をも示している。

(二)、漢籍の声点附和訓と慈恩伝古点とが漢字も和訓も一致するも

の。A、語形が全同ではないもの

(声点附和訓)

(慈恩伝古点)

アタテハ (中)

中アチナムトス

アフドコブ (跨)

跨フフトロヒ

アラハス (著)

著セリ

アランヤ (有之)

有リ

イタス (效)

效イタスコト

オゴル (侈)

侈オコラ

オビ (泊)

泊オビ也

カヘンセ (不肯)

不肯カヘニス

カリキリ (艾夷)

艾カリキリトシラクムト

キケ (聴)

聴キク

クチツカラ (口)

口クツカラニ

コイタルカ (寒)

寒コイタルカ

コイウエ (凍餒)

凍コイウエタル

シツメリ (湍)

湍シツメリ

スキ (軼)

軼スキ

ソコナハレ (残)

残ソコナハレ

タレガ (誰)

誰タレカ

チカフ (誓)

誓チカフ

ツイテ (續)

續ツイテ

ツイデ (統)

統ツイデ

ツガ (使嗣)

嗣ツガ

ナツカ(不懐)

ノレ(乘)

フルヘリ(奮)

ミツ(填)

欲速スミヤケンセマク

△慈恩伝に仮名の附訓が一部で不明のもの

イダス(輸)

イダケリ(懐)

ゴトニ(毎)

ツイデ(次)

ツイテ(尋)

ツクシ(磐)

トモに(俱)

ナツケ(未名)

エカイテ(畫)

B、語形も同じもの

アタシ(他辞)他山^{アタシクハ}

カナシビヲ(哀)哀^{カガシヒ}

キズ(聲)聲^{キネ}

コモく(交)交^{コモク}

スヘテ(凡)凡^{スヘニ}

タビ(行)行^{タビ}

ツケテ(矯)矯^{ツケテ}

ノキスケ(椹)椹^{ノキスケ}

ミゾ(巢)巢^{ミソ}

懐^{ナツク}

乗^{ノレ}

奮^{フルヘリ}

填^{ミツ}

居^{イダス} 欲^{イダケリ}

輸^{ゴトニ}

次^{ツイデ}

尋^{ツイテ}

磐^{ツクシ}

俱^{トモに}

名^{ナツケ}

畫^{エカイテ}

イタラ(不造)造^{イタラム}

カンバタ(綺)綺^{カクムハタ}

コノユヘニ(所以)所以^{コノユヘニ}

シハシハ(驟)驟^{シハシハ}

タテマツル(上)上^{タテマツル}

ツク(託)託^{ツク}

トク(疾)疾^{トク}

ヒツキ(椹)椹^{ヒツキ}

メトル(娶)娶^{メトル}

モ(喪)喪^モ

モロく(の諸)諸^{モロク}

(A)語形が全同でないものを見るに、例えば「有」の「アランヤ」と「有」とは、「アリ」という動詞の訓としては一致しているが漢籍の声点附和訓の方の「アランヤ」は既述の如く、「ヤ」は感動の助詞で、それが古訓法に通ずるものであることを考えると、「有之」の箇所を「アランヤ」と訓む形が漢籍のその文章の訓として伝えられている事に意味があると考えられる。声点附和訓のノレ(乘)、キケ(聴)が「ノル」「キク」でなく、命令形にこの箇所を訓ずる事に意味があるのではないか。(B)の場合にも同様に、その漢字に他の訓も考えられる中で、右の如き訓を附することに意味があると考えられる。声点附和訓の例を顧みるに、同箇所、別訓(この方には声点がない)を併記する例の屢々あることはその現れである。

中 アタテハ(上上上平)

アテ、ハ

アフレ(上上上平)テ

播 ホトコリテ

煽 サカリニシ

行 アヨイテ(平平〇上濁)

オホスル(平平上上)

壘 ソコ ミシ

カキヲ(上平上)

不 採音 カケ(平上)を

コフル(上上上)と

詔 ヘツラフト

折 ワカチ	サハキ(平平濁上)	將 サカタ(上上上)	解 トカヒト
頭 アラハレ・アキラカニ	シキリニ(上上上上) 至 イタル	死 ス	死 ス
亢 フセイテ・ヤスンシテ	タカヒテ(上上上上)	微 テ	戎 ヲ
日 誰	ニサルソといふ 不 レ如 シカ	弊 ヘイ	弊 ヘイ
跡 アトシ	トメ(平上)て	唯 ツエ(上上)	署 ナシ(上上上)
箕 ナマエノ(上上平平)	服 ヤナクヒ	驪 民	民 ナラヘル(上上上上)
軒 ノキ	ノキヌケ(上上上上)	緝 タヒテ	緝 ホを
軒 ノキ	マロウテ	蒲 フキ(上平)テ	蒲 タキテ
軒 ノキ	マロムテ、マロウテ	交 ヨシミヲ	交 ヨシミヲ
軒 ノキ	(上欄)	肯 ムヘナフ(上上濁上上)コト	肯 ムヘナフ(上上濁上上)コト
軒 ノキ	ハラハヒシ(〇平平濁平〇)	奮 フルフ	奮 フルフ
軒 ノキ		每 ツク(上平)	每 ツク(上平)
軒 ノキ		委 ユタヌ(平平上)	委 ユタヌ(平平上)
軒 ノキ		東 ツカヌ	東 ツカヌ
軒 ノキ		東 ホタス(上上濁平)	東 ホタス(上上濁平)
軒 ノキ		每 ツク(上平)	每 ツク(上平)
軒 ノキ		每 ツク(上平)	每 ツク(上平)

臧 ヨミセは(上平〇〇)
ヨミスル

「竭ツク」「臧ヨミセは」の様に活用形の相違するだけの二訓の中の一訓に声点が差されている例のあるのは、先述の声点附和訓が「ノレ(乗)」「キケ(聴)」の命令形であることに意味があるとした事柄と相通するものである。さすれば、声点附和訓は、多くは語彙の特異、漢字との組合せの特異なものであるが、その外にもその箇所漢字の訓法に諸説がある際に、声点附和訓が注意すべき訓として示されたものもあると解せられる。

五、同一訓に声点を差す傾向

右の漢籍訓点資料における声点附和訓の中には、同一訓が二例以上認められる。之を整理すると、次の二つの場合がある。

(1) 同じ内容の漢籍で、異なった点本の同箇所同一訓に声点を差した例(声点は既掲したので省略する)

〇古文孝経

親 ヲミカ (五例) 建久点・仁治本・永仁点・正安点・斯道

柄 ヲカビ (五例) 文庫蔵鎌倉期点

柄 ヲカビ (五例) 建治点・延慶点・永仁点・元徳点・斯道

柄 ヲカビ (五例) 文庫蔵鎌倉期点

以 往 ヲオチカケ (四例) 建治点・永仁点・斯道文庫蔵鎌倉期点

以 往 ヲオチカケ (四例) 仁治本(但、オチツカタ)

条 ヲチク (三例) 永仁点・建久点・斯道文庫蔵鎌倉期点

不 溢 ヲシナチ (三例) 建久点・延慶点・斯道文庫蔵鎌倉期点

給 ヲソギ足 (二例) 延慶点・建治点

傲オゴリ

(二例) 建久点・斯道文庫藏鎌倉期点

オゴル

(五例)

古文孝経建久点(傲)、斯道文庫藏鎌倉期点(傲)、九条本文選卷十四(侈)、論語嘉曆点(奢)

○論語

他オコシ辞

(四例) 文永点・嘉元点・康永点・正和点

吝オコシカク

(三例) 嘉元点・建武点・嘉曆点

オドス

(三例)

九条本文選承安点(撰)、金沢文庫本春秋卷二十九(恐)、文選弘安本(威)

聞オコシ

(二例) 嘉曆点・群書治要卷九論語鎌倉期点

○春秋経伝集解

将解オコシ

(二例) 保延点・金沢文庫本鎌倉期点

カヘサフ

(二例)

古文孝経建久点(覆)、論語嘉曆点(復) 文集卷三正中点(象)、金沢文庫本春秋卷十七(象)

○史記(孝文本紀)

噉オコシ

(二例) 延久点・実隆本

クブサ

(二例)

金沢文庫本春秋卷二十(飢)、文選弘安本(飢)

○文選

攝オコシ

(二例) 九条本承安点・大臣注文選永点

ゴトニ

(二例)

群書治要卷三建長点(每)、帝王略論鎌倉後期点(来朝スルゴトニ)

(四) 異なった内容の漢籍を通じて、或いは同じ内容の漢籍でも異箇所、同じ和訓に声点を差した例。(声点略) (活用語は終止形を立てる)

アタシ

(四例) 論語文永点(他)、嘉元点(他)、正和点(他)、康永点(他)、礼記宣賢点(越)

シ、ツク

(二例)

金沢文庫本春秋卷二十三(肉之)、金沢文庫本春秋卷十六(肉骨)

アフドコブ

(二例) 金沢文庫本春秋卷三(夸)、老子康永点(跨)

スグ

(二例)

金沢文庫本春秋卷十三(迭)、文選弘安本(缺)

アラシヤ

(二例) 金沢文庫本春秋卷二十六(有之)、論語文永点(有矣)

スベテ

(二例)

古文孝経建久点(凡)、古文孝経建治点(攝)

イタス

(四例) 夏本紀鎌倉初期点(廬・碓)、貞観政要建治点(効)、金沢文庫本春秋卷十八(効)

タカブ

(三例)

金沢文庫本春秋卷五(高)、金沢文庫本春秋卷二十(元) 金沢文庫本春秋卷二十四

イダス

(五例) 金沢文庫本春秋卷五(輸)、文集抄建長点(輸)、金沢文庫本春秋卷二十五(不輸、輸)、金沢文庫本春秋卷二十一(隨)

タツ

(二例)

九条本文選承安点(退)、同(効)

タフ

(七例) 金沢文庫本春秋卷五(要)、金沢文庫本

タフ

(七例)

金沢文庫本春秋卷五(要)、金沢文庫本

秋卷十五(要)、文選弘安本(要)、金沢文庫本春秋卷十一(微)、金沢文庫本春秋卷二十(微)、金沢文庫本春秋卷十六(微)、莊子鎌倉期点(邀)	トグ	(四例)	經延慶点(給)、同建治点(給)
文選弘安本(狂)、金沢文庫本春秋卷十六(瘳)	トシ	(二例)	帝王略論鎌倉後期点(疾)、古文孝經建治点(敏)
九条本文選承安点(誓)、秦本紀院政期点(盟)	トホス	(二例)	金沢文庫本春秋卷十三(微)、斯道文庫藏古文孝經鎌倉期点(関)
夏本紀鎌倉初期点(序)、群書治要卷七鎌倉期点(班)、文選弘安本(第)	ナツク	(二例)	金沢文庫本春秋卷二十四(名)、礼記宣賢点(名)
群書治要卷四十二(次)、同卷三十(次)	ノキズケ	(二例)	文選弘安本(軒)、同(楨)
九条本文選承安点(胤)、同(胃)	ヒヂリコ	(二例)	古文孝經建久点(塗)、金沢文庫本春秋卷十三(渾)
周本紀鎌倉初期点(既)、九条本文選承安点(竭)、金沢文庫本春秋卷三(職)	ホドハシル	(二例)	古文孝經建治点(眺)、金沢文庫本春秋卷二十五(眺)
金沢文庫本春秋卷十五(託)、九条本文選承安点(託)、群書治要卷四十六(矯)	ミゾ	(二例)	文選弘安本(溝)、同(渠)
金沢文庫本春秋卷二十五(繫)、古文孝經建久点(綱)、群書治要卷七(纒)、九条本文選卷承安点(統)、金沢文庫本春秋卷十三(從)、文選弘安本(接)、金沢文庫本春秋卷十八(尋)、帝王略論鎌倉後期点(尋)、同(巫)、文選正安本(巫)、史記延久点(襲)、群書治要卷二十五(承)、金沢文庫本春秋卷十三(嗣)、群書治要卷四十七(給)、同卷四十七(給)、古文孝	モロモロノ	(二例)	古文孝經建久点(諸)、古文尚書元徳点(諸)
	ユダヌ	(二例)	金沢文庫本春秋卷三(委)、古文尚書正和点(委)
	ユハフ	(二例)	金沢文庫本春秋卷二十五(縛)、帝王略論鎌倉後期点(縛)
	ワナミ	(四例)	春秋保延点(吾儕・吾儕)、金沢文庫本春秋卷十九(吾儕)、同卷十六(吾儕)

右によると、漢籍において声点を差す和訓というものは、書物と

とに又その箇所ごとに大略定まっていたと考えられる。此の事を、前々項における、平安初期以前の語が声点附和訓として伝わっている事実に関合せると、声点附和訓は、その漢籍における古い時代の訓み方がその一部だけそのままその箇所の訓として後世に伝えられたものと考えられる。従って漢籍の声点はその事を示す機能を担うものと考えられる。但し、その種の古訓は常にどの点本でも声点を差すとは限らない。加點者の古訓明示の態度に厳密と否との相違もあった様である。

六、声点附和訓の性格

和訓に声点を差した語の性格を考えるのに有力な記事として、観智院本類聚名義抄の序の一節がある。

片仮名有朱点者皆有証拠、亦有師説、無点者雜々書中隨見得注付之、不知所追々可決之

此の文頭部の解釈については小松英雄氏の好論がある(注18)。此の観智院本類聚名義抄の片仮名に朱声点のある和訓を、先の漢籍における声点附和訓と比べると、

(a) 声点附和訓が一致するもの

蹠^{ソク}・頰^{キョウ}等……二百二十六語句

(b) 右の中、漢字まで一致するもの

頰^{キョウ}・噉^{タン}等……百二十八語句

となる。因みに、

(c) 観智院本類聚名義抄に所載のない語句

苻^フ・苻^フ等……六十四語句

(d) 和訓が一致するが、観智院本類聚名義抄には声点のないもの

腆^{テン}・溢^{イツ}等……四十一語句
となる。

右掲の「皆有証拠」の解釈については、築島裕博士が圖書寮本類聚名義抄で解明された(注19)同じ立場に、小松氏も拠っている。そこでは、漢籍の傍訓は、文献ごとに固定的に伝承された訓があり、社会性をもっていた為に、名義抄に採録されたとされる。漢籍の声点附和訓の過半数が、観智院本類聚名義抄の声点附和訓と一致する事は、それが、名義抄に採録される条件に含まれるもの——即漢籍の特定箇所の訓として固定的に伝承された語句であった事を意味すると思う。漢籍における声点附和訓が、名義抄の声点附和訓として採録されている事は、圖書寮本類聚名義抄の出典注記との一致によって、次の如く証せられる。

漢籍における声点附和訓

- 填^{テン} (上上上) (夏本紀録倉初期点)
- 慄^{リョウ} (上上上) (古文学経建久点)
- 懾^{セン} (上上) (上) (文選弘安本)
- 開情^{カウキョウ} (上上) (遊仙窟康永点)
- 隰^{シヨク} (上上) (文選弘安本)
- 塗^ツ (上上) (古文学経建久点)
- 触^{シュク} (上上) (文選弘安本)

圖書寮本名義抄

- 填^{テン} (上上上) (平濁上上) 記
- 慄^{リョウ} (上上上) 平
- 懾^{セン} (上上) 濁
- 開情^{カウキョウ} (上上) (上濁) 平
- 隰^{シヨク} (上上) 濁
- 塗^ツ (上上) 平
- 触^{シュク} (上) 濁

名義抄採録の声点附和訓の量は、漢籍における声点附和訓の量より遙かに多い。しかも漢籍の声点附和訓の過半数は、名義抄の声点附和訓に通ずる。共に右述の如く「固定的に伝承された」所の証拠ある訓であるとすれば、両者の量に現われた相違の原因は別に求め

なければならぬ。そこで考えられるのは、漢籍のそれは、平安中期(前半)以前の古い時代の訓法であった事である。古くから、多くの時間を経て伝承され固定した訓ならば、名義抄採録の条件にも適って来るのである。図書寮本名義抄の声点附和訓には出典に新樂府を持つものが多いのに、神田本新樂府天永点の声点附和訓は三例であるのも、神田本には後世読み始められた日野正家の訓等が多く入っており(注20)、古訓法をそのまま伝えたものでないという理由に拠るものと思う。一方、名義抄はその編纂の態度において、古訓法の固定訓を網羅したものでは恐らくないであろうから、漢籍の方にあって、名義抄に見られない声点附和訓のあるのは当然であろう。

次に、観智院本名義抄の序にある「有師説」についてみるに、「師説」が、「証拠」と(a)全く同じ概念、(b)一方が他方に包含されるか、(c)両者全く異なるかの三様が考えられるが、此の漢文の「亦」の用い方からは(a)ではないであろう。一体、漢文訓読の「師説」の全貌を見る資料は知らないが、漢籍の或る種の訓点資料中には諸処に「師説」を注記して伝えている。此の師説の内容については別に述べた事である(注21)。要するに、(i)名称に「師説」「天長師説(天長年時の師説の意)」「或先師説」「先師皆説」「今師説」「賀(陽)師説」「先堂安師説(安野)」等があり、又(ii)師説の存する漢籍は訓点資料によると、「史記」「漢書」「後漢書」「文選」「周易」「毛詩」「春秋」「礼記」「孝経」「論語」で、共に延喜大学式の挙げる大学寮の教科書であること、又(iii)師説の内容が、支那の諸注・諸書や日本の賀陽氏・良岑氏・春澄氏・安野氏・江相公・菅刑部や「良家集注史記」・「賀陽家記」等の諸説によつて、本文字句の校異・字音考証・訓読のこと(不読・音読・爛脱・連読・絶句・万葉仮名訓)・釈義

にわたっていること、又(ii)右の諸氏とは賀陽豊年(弘仁六年八一五薨)・良岑安世(天長七年八三〇薨)・春澄善禰(貞観十二年八七〇薨)・大江音人(元慶元年八七七薨)・菅原是善(元慶四年薨)と見られる事の諸点から考えて、訓点における「師説」は平安初期の大学寮における師(博士たる教官)の講義の説と考えられるのである。

(i) 「天長師説」「先師点書」の例

師説天長師説云。或本安字作交字也、菅家之説亦如此

(書陵部蔵後漢書帝紀第四享祿点上欄)

師説玉字上有符瑞兩字也・集并先師点書无之

(史記孝文本紀延久五年(二〇七三)点裏書)

(ii) 「毛詩」「孝経」の師説の例

爾、子孫シテ反師説音直立反贊シテ反師説音直立反

師説云申重也(上欄)

(本文「故申カヘテ覆カヘテ之」(書陵部蔵古文孝経元徳二年点)

(iii) 師説が訓読を示した例

(不読) 兎ウ々ウ懼ス

或勸物云兎々懼下兎字積文不取、師説不読(裏書)

(金沢文庫本春秋経伝集解卷七、文永六年点)

(音読) 師説集字可読音也、言鳳皇及黃竜相交故、殊音読耳

(本文「乃ナラ者鳳皇・黃竜・鸞鳥比シテニ音ヤリ集ニ七郡ニ」

(書陵部蔵後漢書帝紀三、享祿点)

(爛脱) (上略) 師説無如此之爛脱

(大東急記念文庫蔵論語卷一建武四年点裏書)

〔連読〕 師説当家二字宜連読也（下略）

（史記秦始皇本紀第六、実隆書写本）

〔絶句〕 師説齊威王齊字音氏絶句也、江氏連下

（同齊太后世家第二、上欄）

〔万葉仮名訓〕

相、師説不因播、種出而相也、此間云於呂加於此

（後漢書帝紀第九、享祿点）

（二） 師説に引かれた「江相公」「菅刑部」説の例

菅刑部及江相公之説、府庫之徒庫府之珍怪物也、賀家説言以奇器珍怪之物、徒入家藏之中充滿也、師説菅為先賀為次

（本文）「百官・奇器・珍怪徒蔵満之」

（史記秦始皇本紀第六、実隆書写本）

此の師説が生きて用いられていた（後世の古点本に形式的に転写される事とは区別する）時期は、平安中期の終り頃までであった様で、江談抄第六によると、

三史文選師説漸絶、詞華翰藻人以不重之句、菅宣義見之云（下

略）

とある。大江匡衡は長和元年（一〇二二）歿、菅原宣義は寛弘八年（一〇一一）に三略に加点している。右の記事によれば、平安後期初頭の当時、既に師説が「漸絶」状態であったことを知る。

所で、漢籍における声点附和訓の中には、此の師説の訓と一致するものが認められる。

瑞（平上濁上） 文選弘安本

瑞 文選云我金壁以飾（音当師説古之リ平上平）

（高山寺本和名抄、道円本も大同、但し声点なし）

濁（平上濁上） 夏本紀錄倉初期点

濁 文選海賦云海溟広濁（思種反音音 同師説加太）

（真福寺本和名抄、道円本も同じ）

誑（平上濁上） 九条本文選承安点

刃鄙、文選云蚩眩刃鄙（師説刃鄙阿豆豆蚩眩 阿佐无枝加々夜賀須）

（真福寺本和名抄）

寒（平上濁上） 古文字経正安点

鳴……文選蕪城賦云寒臨颯（嗚音呼格反師説 寒臨颯古伊太流止此）

（道円本和名抄十八）

溝（平上） 文選弘安本

溝……文選師説（平上濁上）（圖書寮本類聚名義抄二四頁）

右の中には、出典漢籍の一致ばかりでなく、文字まで一致するものもある。

此によれば、漢籍の声点附和訓の中には「師説」を明示したのものもあると知られる。これは先の観智院本類聚名義抄の声点が「有師説」に見られる事と又一致して来るのである。

師説が平安初期における大学寮の師の講義の説とすれば、延喜小学式という大学寮のテキスト以外の漢籍、文集・老子・莊子・貞観政要・群書治要等にも声点附和訓のある事実を考えなければならぬ。此等の漢籍は何れも平安初期に講読された証のあるものであって、その点、声点附和訓のない（後世訓読され始めた）中庸章句、朱注孟子とは事情が異なる。即ち、此等における古訓（恐らく平安初期）も、師説と同様に、声点を附すという機能においては師説に準ずるものとして、扱われたものと思う。従って、漢籍における声点附和訓は、平安初期における師説と、同期の他の漢籍の訓説とが、

とあり、漢籍訓点資料でも右掲の如く九条本文選卷一正慶点に「秘
と(上上)なる思^と」があつて通ずる。又、

因^レ修^ニ、(上上平乎)定心^ハ微^シ湛^シ

の「まにまに」は、奈良時代の文献と、平安時代の散文では土左日記に見える語で、平安時代の散文以後「まにまに」に代つた語である。訓点でも平安初期の九世紀前半までに見え、以後は「ママニ」を用いている(注23)。しかるに鎌倉初期の右資料にはその古形が見え、それに声点が差されているのである。更に教授抄の裏書(注24)には

条 オチオチ(上上濁平乎) 左府御説也

オチオチ(上上平乎)

或僧説也

オチオチ(平去上)

智賢五師説云相慈五師伝説也

とある。此の和訓は、既掲の如く、古文孝経の古訓にもあり、それも永仁点・建久点と斯道文庫蔵鎌倉期点とで声調がやはり異なつていた事に思い併される。

右の如く、訓点資料における声点附の和訓は、今後更に究明さるべき多くの問題を持っているのである。

(注1) 漢書揚雄伝天曆二年点に一箇所だけ疑わしい例がある。

覆製本十八表四行目の、

風縱^レ從^レ而扶^レ轄^ト兮

のクサヒ(久さヒ)の如き字体)の「久」の左下と「さ」の左下に「・」の如き点が見える。築島裕博士は、「クサ」にのみあつて「ヒ」には見えない事と、観智院本類聚名義抄の「上平平」(二例)の型と一致しない事から疑われた。(濁点の起源)東京大学教養学部人文科学科 紀要三十二輯、昭和

三十九年四月)。筆者も、全巻中孤例であるばかりでなく、平安中期資料にも全く例を見ない事から、声点と見るのを疑うものである。因みに、岩崎文庫蔵尚書平安中期点の

兩交^ニ修^レ子^ト

の「カモ」に覆製本で声点の如く見えるのは、墨汚と虫損であるから、此の資料にも声点附和訓は皆無である。

(注2) 大学令及び平安初期中期以前の古記録によつて知られる。

(注3) (イ)ヲコト点のみで仮名訓の無い資料の例は、尚書正義嘉元二年点二十冊が之である。

(ロ)仮名訓が極めて少数である資料の例は、五臣注文選院政初期点が之である。

(ハ)残簡等で、全巻の量が少量の資料の例は、古文尚書元亨三年点卷十三残簡、史記范雎蔡沢列伝鎌倉期点残簡、貞観政要の五島美術館本・斯道文庫本が之である。

(ニ)僧侶の移した資料で、声点附和訓を見ないものの例は、

書院部蔵老子至徳三年点(慶秀三十七歳の点)

帝範応安元年点(良賢の点)(清原良賢と時代が合わず、訓法上僧侶移点と考えられる)

猿投神社蔵帝範臣軌は長仙寺で玄家の書写

新樂府永仁元年点は、朝誉の移点

新樂府文和二年点は、文主千若丸

又、論語卷七、八鎌倉初期点は、識語を欠くが、その訓法は仏家点の特徴をも持っているので僧侶の手で転写された事が推定される。

(注4) 一巻中に声点附和訓の数が二十例以上の資料は院政末期

の文選卷二十、古文孝経建久六年点・夏本紀鎌倉初期点で、此の時期に集まっている事に拠る。他に二十例以上存する資料は、文選弘安五年本だけである。

(注5) 「茂也」は仮名がないが、字訓表記と見て、観智院本類聚名義抄に「音。戊。モ(平)シ(上)」とあるのに拠った。「モシ」は、万葉集に「石乍自 木丘開道(卷二・一八五)」とある。

訓点の引用は、原本のヲコト点を平仮名で、仮名を片仮名で表記し、推読は片仮名を括弧に包んで示した。漢字の四声点には特に必要とする箇処以外は、印刷の都合上省略した。

(注6) ここに「同じ訓」というのは、語形が全同である事を指すのではなく、助動詞の有無(従って活用形が変る)とか、「ウクモテリ」モテリ」の如き音の違いとか、或いは次例の如く一方が音便であるとかの少異は捨象して、同一単語による訓という意味である。

(注7) 拙稿「古文尚書の訓読史」(未発表)

(注8) 拙稿「漢文訓読史研究の一試論」(国語学五十五輯、昭和三十八年十二月)

(注9) 拙稿「金沢文庫本春秋経伝集解における平安初期漢籍訓読語の残存」(訓点語と訓点資料二十五輯、昭和三十八年三月)

(注10) 「注9」の拙稿で論じた。

(注11) 「注9」参照。

(注12) 拙稿「万葉集における漢文訓読語の影響」(国語学五十輯、昭和三十九年十二月)

(注13) 築島裕博士「平安時代の漢文訓読語につきての研究」五

五三頁。

(注14) 万葉集大成総索引、古事記大成総索引、大野晋博士「上代仮名遣の研究後篇、日本書紀歌謡及び訓注語彙総索引」による。音仮名を主とした。訓仮名の例及び必要に応じては明記した。「」内が右の上代語の例又は出典である。出典は最古例と限らず、当該の語の有る事の指摘に重点を置いた。又、声点附和訓が如何なる漢字の訓であるかはここでは問わない。

(注15) 架蔵稿本の「上代語索引」(仮称)による。次の資料を含む。

金石文(仮名源流考証本写真)、上宮聖徳法王帝説、一字頂輪王経儀軌音義、石山寺蔵大般若経音義、日本感靈録、成唯識論述記序釈、新訳華嚴経音義私記、高橋氏文、風土記(常陸国)、古風土記逸文、四分律音義、大般若経要集抄、南京遣文所収仮名資料、南京遣芳所収仮名資料、南京遣文補遺所収仮名資料、唯識論疏肝心記、因明論疏明灯抄

(注16) 天曆期以前とした理由は、声点附和訓のない漢籍の古い資料が、漢書揚雄伝天曆二年点以前の資料である事、及び和名抄(声点附和訓との一致が見られた)の成立と期を接する事による。しかし、比較に用いた資料の多くは平安初期資料であり、平安中期(天曆以前)の資料も、和名抄の如き古辞書や訓点資料等で、保守性の強いものであるから、実質的には、平安初期の言語との比較に相当すると考えられる。

(注17) 全巻を検したのは次の資料である。(括弧内は略称) 沙門勝道歴山壁玄珠碑(二荒山碑文)

石山寺本金剛波若經集驗記

天理図書館本金剛波若經集驗記

西大寺本金光明最勝王經古点 (最勝王經古点)

小川本願經四分律古点

觀弥勒上生兜率天經贊平安初期点

知恩院藏大唐三藏玄奘法師表啓古点 (玄奘表啓古点)

地藏十輪經元慶七年点 (十輪經元慶点)

尚書延喜頃点

(注18) 「語調史料としての類聚名義抄——図書館本および観智

院本にみえる和調の声点の均質性の検討」(東京教育大学文

学部紀要第九輯、昭和三十九年三月)

(注19) 築島裕博士『平安時代の漢文訓読語につきての研究』第

七章第四節

(注20) 拙稿「神田本白氏文集の訓の類別」(国語と国文学、昭和

三十八年一月号)

(注21) 「訓点資料における師説について」(訓点語学会発表、昭和

四十一年六月)

(注22) 古い時代の訓法が残存するには諸種の形態が認められる

〔平安初期訓法残存の諸形態について〕(未発表)。その中

の一形態が声点附和訓と考えられる。しかも、九条本文選卷

二十九裏書の万葉仮名訓が書物に基いてもとの表記のままに

伝えられたのに対して、これは恐らく聴く行為を介在させて

伝えられた形であらう。

(注23) 関一雄氏『まにまに』『ままた』『考』(山口大学文学会誌

十六卷一号、昭和四十年七月)

(注24) 此の資料は先年興福寺にて調査したもので、此の例は築

島博士の見出されたものである。

〔付記〕本稿は、昭和三十九年十一月第十一回訓点語学会研究発

表会(京都大学)で発表した原稿をもとにして成ったものではあ

る。本稿を為すに当り、藤原与一博士、築島裕博士、小松英雄

氏の教示を得た。又、本稿所載資料の調査に際し所蔵者各位の

芳情を賜った。共に厚く御礼申上げる。又成稿後、築島博士・

小松英雄氏から種々の有益な教示を得て、加筆することが出来

た。記して感謝し奉る。

(昭和四十一年五月六日)

Distribution of Tonal Marks in the Texts of Chinese Classics Rendered into Japanese

KOBAYASHI Yoshinori

Japanese words written in *katakana* which correspond to Chinese characters in the texts of Chinese classics rendered into Japanese language and copied during late Heian, Kamakura and Muromachi Period often have dots around each component so far recognized as denoting both tonal accent and *sei-daku* distinction.

A strong inclination in the distribution of these dots found in the texts in question suggests us the existence of another unknown function assigned to them. In this paper, the author tries to prove that the actual use of the words accompanying the dots in these texts can mostly be traced back to the Japanese rendering of Chinese classics in the early Heian Period, and that the combination of a specified Japanese word with a specified Chinese character in these cases were initiated by the authoritative scholars of that period and transmitted to later times. It is evident that the dots in these texts were intended to distinguish such particular words from less important ones.